

42199

教科書文庫

4
810
42-1925
20000 39351

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

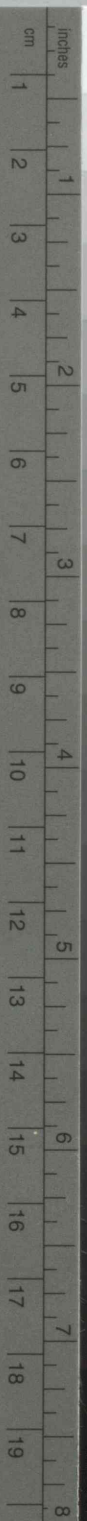


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
17019
資料室

大正女子國文讀本

第二修正版

卷一



375.9
Holl

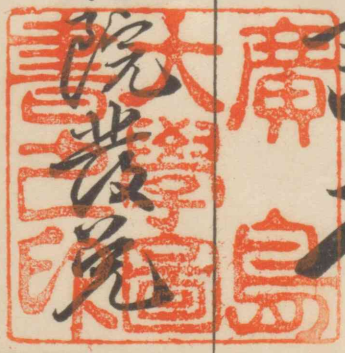
資料室 日五十月一年四正六
濟定檢省部文
用科教科語國校學女等高等

保科 存一編



大正女子國文讀本

東京 館社育英書院



大正女子國文讀本 卷一

目次

- 一 皇太子殿下の御令徳……………(皇太子殿下御外遊記) 一
- 二 エルサレムの燕……………徳富健次郎……………七
- 三 花の東海道……………横山達三……………二
- 四 しゃぼん球……………幸田露伴……………六
- 五 明治神宮に参拜して…………………………六
- 六 菜の花と小娘 その一……………志賀直哉……………二
- 七 菜の花と小娘 その二…………………………六
- 八 山路の雲雀……………夏目漱石……………三

目次

九	郷里と祖母	正宗白鳥	七
一〇	天使ルイゼ		四
一一	和宮の御婦徳	萩野由之	四
一二	灯を見に	島崎藤村	四
一三	都會と田舎	坪内逍遙	五
一四	叔父の家	與謝野晶子	三
一五	果物を贈る		七
一六	夏の夜	土井晩翠	七
一七	田園の夏	杉村楚人冠	七
一八	由比が濱	澁川玄耳	七
一九	心柄	北原白秋	八

二〇	達磨の話	小泉八雲	九
二一	童謡二篇	島木赤彦	九
二二	燈臺守	藤井乙男	一〇
二三	俊寛僧都		一〇
二四	舊師 その一		一一
二五	舊師 その二		一一
二六	運動會の前		一二
二七	メーリー夫人	下田歌子	一二
二八	人の運	大町桂月	一三
二九	笑の話	高島平三郎	一四
三〇	祭禮に人を招く	樋口一葉	一五



三二 砂山の幻……………西條八十……………一頁

三三 ボチ その一……………二葉亭四迷……………二頁

三三 ボチ その二…………………………一頁

三四 蟲供養……………三宅やす子……………七頁

三五 秋の七草……………松村任三……………七頁

大正女子國文讀本 卷一

一 皇太子殿下の御令徳



エジプトに駐劄して居る英國統監アレンビー元帥は、殿下がポートサイドに御寄港の節、是非カイロに行啓を願ひ、元帥の賓客として御款待申上げたいと申出たので、殿下は欣然その厚意をお受けになつた。

茲において、此の日午前十時、アレンビー統監の派遣した英

此の日
大正十年四月
十八日

一 皇太子殿下の御令徳

一

兩殿下
皇太子殿下
閑院宮殿下

國の文武官は御出迎のため來艦し、兩殿下には十時四十五分、特別列車でカイロに向はせられた。午後三時カイロに御到着になつて、停車場構内では英國儀仗隊を、構外ではエジプト儀仗隊を御閱兵になつた。カイロ市は街の體裁が殆ど歐洲風と云つてよい位に整頓してゐる。悠久數千年の古を偲び、又現代のエジプトを想ふ時、吾人の腦裡に徂徠するものは、人生の倏忽なるに比して、時代の作つた歴史の不朽な事實である。蜉蝣の生にも似た人の子が、千古不滅の化育を宇宙に残すことである。殿下は自動車で、直ちにナイル河畔の統監邸に入らせられ、統監夫人その他英國官吏に御接見の後、再び自動車を以て、

ピラミッド及びスフィンクス等を御見物に成らせられた。此の日は折ふし二十年以來曾てない砂嵐サンドストームの天候であつた。此の砂嵐と云ふは、カイロ附近の沙漠に烈風が起つて砂塵を卷上げ、これをカイロの市街に降らすのである。沙漠の嵐であるから、其の風は非常の熱氣を持つてゐるので、いかにも暑苦しく、又何となく息づまる思ひがして、恰も機關室に居るやうな氣持である。のみならず黄色な粉に似た細かい砂が、衣服と云はず、顔手足と云はず附着するので、甚だ心持がよくない。併しかゝる特別な天候には、中々望んだとて會へるものではないので、一行にとつて此の上もない接待の一つであつた。土地の人々は、その夕官邸に於ける

ハイランド
英國北方の山
地スコット
ランド地方を
いふ
バグパイプ
スコットラン
ドで用ふる風
笛

園遊會において、頻りに「不快な天氣で申譯がない。」と、殿下に申上げてゐたが、殿下は却つて「よい經驗を得た。」と御歡び遊ばしたのであつた。
午後五時から統監邸庭園で、殿下を主賓とした清楚な園遊會が催された。それには同地に駐割する外交團員及びエジプト政府の閣員その他、高官等が列席した。此の日、英國ハイランドの軍樂隊のバグパイプは、最も御旅情を慰め奉つた。
八時から官邸で統監主催の公式晚餐會があつた。此の晚餐の後のことであつた、殿下が美しい挿話をお作りになつたのは。

エルサレム
アッパトルコ
のシリヤにあ
る町

アレンビー元帥夫人が、殿下に「今回エルサレム地方に御出でのないのは誠に遺憾で御座います。」と事もなげに申上げた。御承知のやうに、エルサレムは耶蘇教徒猶太教徒の聖地として、歴史上最も有名な所であり、地學上有名な死海の岸に近い所でもあつて、エジプトからお出でになることはさほど困難ではないのである。その上、同地駐割の英國統監サミュエル氏よりも、豫て殿下を同地にお迎へ申したいとの申出でもあり、殿下にも同地御訪問の御考もないではなかつたが、何れにもせよ時間が無いので、折角ではあつたが、サミュエル氏のお招きをお断りになつたのであつた。
然るに、殿下はこの元帥夫人の言葉に對して「自分もあの地

方は、夫君元帥が世界戰爭中祖國のために偉大な功績を立てられた所であるから、是非訪ねたいと思ふが、時間の都合で立寄る事の出来ないのは誠に残念である。と仰せられた。實にアレンビー元帥が、一獨立軍の司令官として、炎熱と戦ひ、困苦を忍んで、聖都エルサレムを攻略し、聯合與國の耶蘇教徒を歡喜せしめたのは西曆千九百十七年四月で、同元帥が中將の時代であつたのである。

殿下の咄嗟の御挨拶は簡單であつたが、閃光の如くに元帥夫人の胸に響き、當時元帥が氣候風土の全く異なる酷熱のアラビヤ沙漠に曠日彌久の戦を續けた光景を、蜃氣樓のやうに眼の前に回想されたことであらう。元帥夫人は非常

な喜悅の情を以て、殿下の御言葉に感謝したこのことであつた。

殿下は又屢、元帥とも御對話になつたのであるが、巨軀六尺を凌ぐ赭顔の老元帥と、春秋に富ませられる海軍少佐服を召した殿下とが、檳榔子の風薫る官邸においての御會談は、實にそれ自らが美しい畫圖であつた。(皇太子殿下御外遊記)

皇太子殿下御外遊記
宮内書記官 伯
爵二荒芳徳、
外務書記官 澤
田節藏共著

橄欖山
エルサレムの
東にある丘陵

二 エルサレムの燕

春だ。部屋から眺めると橄欖山が、私どもの來た時より餘程緑になつたかのやう。朝は蒼い霞が谷を満たし、晝ごろには軟かい綿のやうな春雲が一つ二つ高い塔の上に遊ぶ。

ソロモン神
殿の模型
にアモンの
サレムの神
に模して作
たものとい
シツの帝室
の造技師
營

午後、ソロモン神殿の模型を見に行くつもりで出かけたが、所在が分らぬ。歸つて茶を飲み、少し書き物をし、夕方屋上に上る。風が少し冷たいが、夕景色が美しい。燕が數かぎりなく飛びかふ、ちゝちゝと呼びながら。エルサレムの燕は全く名物の一つである。エルサレムには鳩も飛べば雀も飛ぶ。稀に鶴も舞ふ。併し燕の多いのに比すべき何物もない。ゆふべ、何處から出て来て何處の巢に歸るのか知らぬが、エルサレム城上一面蚊の如く群れ、さうして燕の如くといふより外に形容のしやうもない散りやう舞ひやうをする。私どもは、毎日の事だが、其の度ごとに彼等の飛翔の譬へやうもない美にうたれる。何の爲

にあのやうに舞翔けるのか。何の用もありげでない。飛ぶのが面白い、翔けるのが嬉しくて飛翔けるやうに見える。遠きは針頭の一点、近きは白い胸を見せて、ちゝちゝちゝとかけ聲をしつゝ、何萬何千萬といふ數知れぬそれが、水色の空から城へ、城から空へ、山から塔へ、塔から山へ、稻妻の如く閃めき、礫の如く落ち、夢の如く輕やかに、想の如く速かに、光線と射音波とゆらぎ、誠に快い舞の限を見せる。あの夥しい燕が、あんな自由な全速の飛翔をして、一度の衝突もなく、自づからにして、それかはし、綽々として餘裕のあるのは、全く驚嘆の外はない。私どもは日々見馴れてゐながら、今夕も亦、今更のやうに、この夥しい燕の體で譜を描く大音曲に

見とれる。

夕はいよ／＼進む。死海の向ふの山は淡い、夢のやうに。高塔聳え、緑豊かな橄欖山、一本の棕櫚を前景にして、圓屋根・鉾屋根・平屋根の高低参差としたエルサレム、皆美しい。私は妻にいふ。

「先日私はエルサレムがいやになつて、早く立たう、二度と來まいと思つたが、やはりエルサレムは美しい。」
全くエルサレムは美しい都だ。

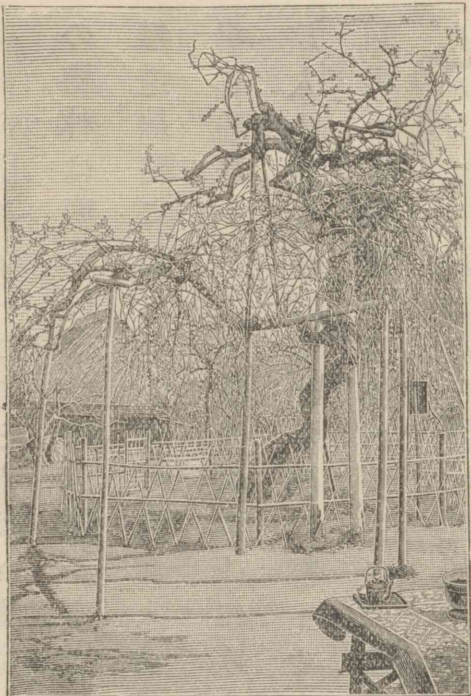
風が冷たくなつたので、私どもは下界に下りる。

徳富健次郎
現代の文學者
號は蘆花

(徳富健次郎—日本から日本へ)

三 花の東海道

東海道は、花の東京から花の西京に達する花道である。東



梅 水 照 の 田 杉

海道は花の東海道である。

御殿山の櫻に別れて、野毛山の櫻に逢ふ。直ちに左右の窓に花が映じて來る。中にも緑の松

にまじる花の雪は、別けて美しい。併し京濱間では梨の花が第一である。線路に沿うて左右に廣い梨畑、大森・川崎に

御殿山
品川に在る
野毛山
横濱に在る

杉田
神奈川縣久良岐郡
大字、風浦村、横濱の南二里

巨つて白い花が月に匂ふなどは、花の東海道に於ける捨て難い景色である。梅花は東海道に澤山はない。杉田の梅は世に隠れないけれども、やゝ海道を離れてゐる。小田原の梅林は廣くはないが風情があつて、花もまた大そう早い。鐵道線路に最も近いのは、大森八景園の梅花である。停車場に蓋ひかゝるやうな岡の上に咲きこぼれてゐる梅花は旅人の袂に薫じて、匂を西の都までもたらすであらう。箱根から伊豆半島邊は白百合の領地、御殿場から三島、沼津にかけては桃の領土、従つて桃の羊羹は此の邊の名物である。濱梨羊羹をつくる濱梨は、富士の山腹に生ずる小さい木で、小さい花を開き、丸い實を結ぶ。其の實を加味したの

八橋
今の愛知縣碧海郡牛橋村、昔の杜若の名所

が濱梨羊羹である。最もうまいのは沼津の桃羊羹。沼津には廣々とした桃林があつて、海道を飾つてゐる。駿河、遠江から三河へかけては、色々の花があるけれど、大部分は茶の花に蔽はれてゐる。敢て風情に富むと云ふのではないが、美しく栽ゑられた茶畑の、廣く限がないのも心持がよい。三河の八橋には、今、杜若が僅かに残つて、名だけ東海道を飾る名所となつてゐる。



茶摘み

名古屋には櫻や柳は澤山ない。名古屋の平原を飾るものは藤の花である。これほどの大平原は、海道には二つとない。その平原を紫の色が包むのは、花の東海道に於ける、一の大いなる景色ではあるまいか。夏の旅に嬉しいものは、南瓜の野趣である。その葉と花とが大きく廣がつてゐるのは、實に面白い田舎の景色で、旅人に尠からず涼氣を與へるものである。美濃路を越えて、近江路に達する間の南瓜は、瓢箪形のものであるが、その花の咲匂ふ處は、はや上方の趣味をあらはしてゐる。

京都は五十三驛の花の雙六の「上り」であつて、御室嵐山の花の賑ひ、花の東都アヅマに對する一大花園である。そして此の花

友禪染
一名鴨川染、
寛永中、京都、
寛永中、京都、
禪の畫術、梅丸友
禪が考へ出し

の國から、花よりも猶美しい友禪染が産出するのはまことに面白い事である。



祇園の櫻

東海道花時の旅は、春の初から末にかけて、最も好いけれども、いつも到る處に各花の領地があつて、清い薫の絶えることがない。

地上に春の花が落ちてしまつて、梢に緑の繁る頃は、海道を見下してゐる富士山の中腹に、石楠花の花が美しく、紅、空に匂ふのも、亦捨てがたい景色である。

(横山達三—文藝地理東海道五十三次)

横山達三
文學士、文章
家は、號は健堂
又は、黒頭巾

四 しゃぼん球



霞たつ春の午すぎ

かぶる髪愛らーき児の

路ばたの柳によりて

かぐはーきいぶきやきーく

しゃぼん球そと吹きいたす

緋櫻の答の口に

含まれし霞のすぬより

罪もなく憂も知らぬ

幼児のおもひの春を

結びてなりーしゃぼん球出づ

美ーく舞ふしゃぼん球

春の日にぬれいろ映えて

七色のあやにあやーく

春風の空にうかれて

うくりくと相追うて飛ぶ

その球のゆくへを問はぬ

幼兒の思のどかに

その人のあたりを戀はぐ

その球の心なく去る

面白の春や 春 春

(幸田露伴―曉靄集)

幸田露伴
現代の文學者
名は成行。文
學博士

五 明治神宮に參拜して

民子さん先日御手紙をありがたう。いよ／＼今年から女學校の生徒さんですね。さぞ楽しく通學してゐること

でせうね。實は今度叔父さんが急に東京の本店へ勤めることになつて、民子さんから御手紙を貰つた頃は、上京の支度を取紛れてゐた爲、つい御無沙汰をしました。去る十日、漸く表記の處に落着きました。今日は始めて少し暇が出来たので、叔父さんと明治神宮を參拜して來ました。その模様を御知らせませう。

まづ電車を降りて、表參道を眞直に進み、神宮橋に近い第一の鳥居の前まで來て、遠く神苑の中を望みますと、何ともいへぬ尊い感じに打たれます。參道の兩側には緑の林が長く續いて、一足ごとに益濃くなつてゐます。鳥居から一町ばかり奥へ入つて神橋の上に来ると、何處からともなく清

筑波山
常陸國筑波郡
にある山

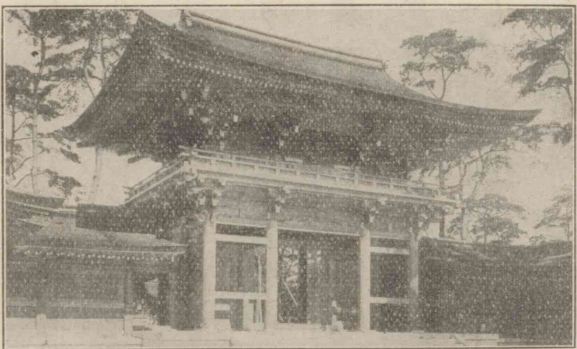
い水音が聞えて來ます。美しく磨き上げた石の勾欄にもたれて下を見ると、谷川の趣を見せた細い流の兩岸に、筑波山から移した自然石が面白く配置されて、その間に數十株の楓が、今を盛と若葉の色を競うてゐました。

神橋を渡ると、兩側は一帯の杉並木になつて、その左側の並木の斷えた處に、高さ三丈九尺といふ名高い大鳥居が立つてゐます。これは千七百四十年の齡を重ねたといはれる臺灣産の檜の古木で造られたものです。

こゝから參道が左へ折れて急に廣くなります。その道の盡きた處で右を見ると、目先がばつと明るくなつて、約一町ほど續く廣い道の奥に、高く繁つた松の林を背景にして、莊

嚴な檜皮葺の神殿が仰がれます。

南神門を入ると拜殿があります。拜殿の奥には、中門と本



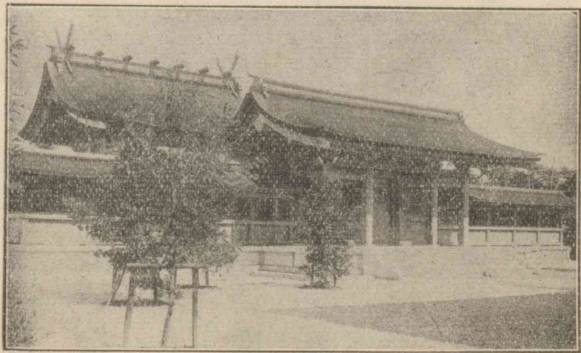
明治神宮 南神門

しぐみしました。

殿との御屋根が尊く見えます。拜殿にのぼつて拜みますと、芳しい檜の香が高く薫つて、いかにも神々しい感じがしました。あゝ此の神殿の奥深く、明治天皇と昭憲皇太后の御神靈が、とこしへに鎮まりおはしますのだと思ふと、何ともいへぬ有難い心持に打たれて、思はず涙がさ

拜殿の左右には、同じ形の廻廊が翼を張り、その右の廻廊に續いて、便殿が見えます。社殿全體の御結構は、誠にたとへやうもない莊嚴な美しいものです。拜殿を下りて、西神門を出ると、約一町に亘る森林があつて、その向ふには、明るい芝地が、一面の緑を暖かな日光に曝してゐます。こゝらへ來ると、周圍の模様はよほど庭園風になつて、いろいろの樹木の中に、落葉樹の多く交つてゐるのが目につきます。寶物殿へ行くまでの間、ずっと長く續いてゐる道

殿本御と門中 宮神治明



が、かうした風の神苑の中に通じてゐます。寶物殿は、後に一帶の密林を負ひ、前には優雅な橋を架けた池を控へて立つてゐます。その池の堤をめぐつて、若々しい楓の樹が植ゑつらねてあります。參拜を終へて神苑を出ると、もう夕暮の色があたりをこめて、振返つて見る神殿のあたりは、すっかり深い靄に包まれてゐました。私は今までに、今日ほど尊い心持を感じた事はありません。別封で明治神宮の繪葉書を送ります。お母様への手紙にも書いておきました。今年、夏休には姉さんと一しよに遊に入らつしやい。その時には、第一に明治神宮へ案内をして上げます。左様なら。

東京の叔母から

五月一日
民子様

六 菜の花と小娘 その一

或晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。やがて夕日が新緑の薄い木の葉を透かして赤々と見られる頃になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持出して、そこで自分の脊負つて來た荒い目籠に詰めはじめました。ふと小娘は誰かに自分が呼ばれたやうな氣がしました。「え、え。」小娘は思はずさう云つて、起つて其のあたりを見廻しましたが、そこには誰の姿も

見えませんでした。「私を呼ぶのは誰。」小娘はもう一度大きい聲でかういつてみましたが、やはり答へる者はありませんでした。小娘は二三度そんな氣がして、初めて氣がつくと、それは雑草の中から只一本、僅かに首を出してゐた小さい菜の花でした。小娘は頭に被つて居た手拭で、顔の汗を拭きながら、「お前、こんな所で、よく淋しくないのね。」といひました。「淋しいわ。」と菜の花は親しげに答へました。「そんならなぜ來たのさ。」小娘は叱りでもするやうな調子でいひました。すると菜の花は、雲雀の胸毛に着いて來た種がこゝでこぼれたのよ。困るわ。」と悲しげに答へました。さうして、ごうか仲間の多い麓の村へ連れて行つて下さいと

頼みました。

小娘は可哀さうに思ひました。小娘は菜の花の願を叶へてやらうと考へました。それで靜かに根から抜いて、手に持つて、山路を村の方へ下つて行きました。路に添うて清い小さな流が、水音をたてて流れて居ました。暫くすると、「あなたの手は随分ほてるのね。」と菜の花はいひました。「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ。眞直にして居られなくなるわ。」といつて、うなだれた首を小娘の歩調に合はせて、力なく振つて居ました。小娘は一寸當惑しました。しかし小娘には、圖らずいゝ考が浮びました。小娘は身軽く路端に蹲んで、黙つて菜の花の根を川の流へ

浸してやりました。「まあ。」菜の花は生返つたやうな元氣な聲を出して小娘を見上げました。すると、小娘は宣告するやうに、「此の儘流れて行くのよ。」といひました。菜の花は不安さうに首を振りました。さうして、先に流れてしまふと恐いわ。」と云ひました。「心配しなくてもいゝのよ。」さういひながら、早くも小娘は流の表面で、持つて居た菜の花を離してしまひました。菜の花は、「恐いわ、恐いわ。」と流の水にさらはれながら、見る／＼小娘から遠くなるのを恐しさうに叫びました。が、小娘は黙つて兩手を後へ廻し、脊で跳る目籠をおさへながら駈けて來ます。菜の花は安心しました。さうして、さもうれしさうに水面から小娘を見上げて、

何かと話しかけるのでした。

七 菜の花と小娘 その二

何處からともなく、氣輕な黄色い蝶が飛んで來ました。さうして、うるさく菜の花の上をついて飛んで來ました。菜の花はそれをも大變嬉しがりました。しかし蝶は何時か又どこかへ飛んで行つてしまひました。菜の花は小娘の鼻に玉のやうな汗が浮び出て居るのに氣がつかしました。「今度はあなたが苦しいのね。」といひました。が、小娘は却つて不愛相に、心配しなくてもいゝのよ。」と答へました。菜の花は叱られるのかと思つて、黙つてしまひました。間もな



く小娘は菜の花の悲鳴に驚かされました。菜の花は流に波打つて居る水草に根をか
らまれて、さも苦しげに首を
振つて居ました。小娘は「ま
あ、少しさうしてお休み。」とい
つて傍の石に腰を下しまし
た。「こんなものに足をから
まれて休むのは、氣持が悪い
わ。」さういひながら菜の花
は尙しきりにいや／＼をし
て居ました。「それでいゝのよ。」小娘はいひました。「いや

なの。休むのはい、けれども、かうして居るのは氣持が悪いの。どうか一寸あげて下さい。どうぞ。」と菜の花は、しきりに頼みましたが、小娘は、「い、のよ。」と笑つて取合ひませんが、そのうち水の勢で菜の花の根は自然に水草から、すり抜けました。さうして不意に、流れるう！」と大きな聲をして、菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立上ると、それを追つて駈出しました。少し來た所で、やはりあなたが苦しいわ。」と菜の花はこはぐいひました。「何でもないのでよ。」と小娘も優しく答へて、さうして、菜の花に氣を揉ませまいと、わざと菜の花より二三間先を駈けて行く事にしました。麓の村が見えて來ました。小娘は、「もうすぐよ。」と聲

をかけました。「さう。」と後で菜の花が答へました。暫く話は絶えました。たゞ流の音に混つて、ばたばたばたばたと、小娘の草履で走る足音が聞えて居ました。ちやばーんといふ水音が小娘の足元でしました。菜の花は死にさうな悲鳴をあげました。小娘は驚いて立止りました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたやうになつて、早く早く。」と延上つて居ます。小娘は急いで引上げてやりました。「どうしたのよ。」小娘はその胸に菜の花を抱くやうにして、後の流を見廻しました。「あなたの足元から何か飛込んだの。」と菜の花は動悸がするので、言葉を切りました。「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて、不意に私の顔の前に浮上つたのよ。

志賀直哉
現代の文士

口の尖つた意地の悪さうな、あの河童の様な顔に、もう少しで、私の頬つべたをぶつける所でしたわ。」といひました。小娘は大きな聲をして笑ひました。「笑ひ事ぢやあないわ。」と菜の花は恨めしさうにいひました。「でも、私が思はず大きな聲を出したら、今度は蛙の方でびつくりして、あわててもぐつて了ひましたわ。」かういつて菜の花も笑ひました。間もなく麓の村へ着きました。小娘は早速自分の家の菜畑にそれを植ゑてやりました。そこは山の雑草の中とは違つて、土がよく肥えて居りました。菜の花はどん／＼延びました。さうして、今は大勢の仲間と仲よく仕合せに暮らせる身となりました。

(志賀直哉「荒絹」)

八 山路の雲雀

立上る時に向ふを見ると、路から左の方に、バケツを伏せた様な峯が聳えてゐる。杉か檜か判らないが、根元から頂まで悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、繼目が確と見えぬ位にもやが濃い。すこし手前に、禿山が一つ群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は、巨人の斧で削り去つたのか、鋭い平面を、やけに谷の底に埋めてゐる。天邊あまのへに一本見えるのは赤松だらう、枝の間の空さへ判然してゐる。行手は二町ほどで切れてゐるが、高い所から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。

赤い毛布
た田舎人のこ

路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、左程手間もいるまいが、土の中には大きな石がある。土は平にしても、石は平にならぬ。石は砕いても、巖は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を譲る様子はない。向ふが承知しなければ、乗越すか廻るかしなければならぬ。巖のない所でさへ歩きよくはない。左右が高くなつて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はうより、川底を涉ると云ふ方が適當だ。元より急ぐ旅ではないから、ぶら／＼と七曲にかゝる。

忽ち足下で雲雀の聲がしだした。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されてゐた、まらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴盡し鳴明かし、また鳴盡さなければ氣が濟まんと見える。其の上、何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えてなくなつて、只聲だけが空の裡に残るのかも知れない。巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて横に見下

すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあそこへ落ちるのか
と思つた。いゝやあの黄金の原から飛上つて來るのかと
思つた。

次には、落ちる雲雀と上る雲雀とが、十文字にすれ違ふのか
と思つた。最後に、落ちる時にも、上る時にも、また十文字に
すれ違ふ時にも、元氣よく鳴續けるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある
事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がな
くなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める、雲雀の
聲を聞いた時に魂のありがが判然する。雲雀の鳴くのは
口で鳴くのではない、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲に

夏目漱石
名は金之助、
英文學者、小
年五十五、
英文學者、
年五十五、
英文學者、
年五十五、

私の郷里
作者正宗白鳥
氏は、岡山縣
二年前、山縣
氣郡伊里村
穂波に生れた

現はれたものの中で、あれほど元氣のあるものはない。あ
あ、愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

(夏目漱石 草枕)

九 郷里と祖母

私の郷里は、人家の疎らな片田舎で、私の家はその片端の丘
に沿うて建つてゐる。前は田や畠で、それを傳つて二三町
行くと、淺い小川が流れてゐる。鮠や鮎が少しは釣れるさ
うだが、あまり魚のすむ川でもない。しかし、田の水を落す
頃には、私どもはよく鮎をすくひに出かけた。夏には、眞裸
のまゝ、家を飛出して泳ぎに行く、橋の上では夕涼をする。

川向はもう他郷だ。川一つ隔てたばかりで言葉の調子にすら、どこか違つたところがあつた。私はこの川向ふの小學校へ通つた。さうして學校の歸にも、この橋へ近づくと急に氣が弛んで來る。橋の上からは村が一面に見渡されて、遠くは寺の鐘撞堂から、近くは白い腹掛をつけた石地藏私の家の白壁、門口に繁つた合歡樹^{ハナノキ}まで、ばつと眼にはいつて來る。太郎吉の藁屋、松藏の瓦屋、お鷹婆さんの板家など、一々指して示すことが出来る。田圃に働いてゐる百姓であれ、土手や畔道を歩いてゐる草刈であれ、爺さんでも媪さんでも、一々その名を告げることが出来る。たまに見知らぬ顔があれば、それは他村の者で、一度渡れば二厘の橋錢を

取られる連中である。

私は、小學を卒業して、七八里離れた小都會の中學へ旅立つた日まで、殆ど一晩もこの村に眠らぬことはなかつた。村の女の大半は、こゝに生れ、こゝに老いるのだが、私の祖母も十歳の時、かの川を渡つて村の人となつて以來、行年七十五歳の一生のうち、めつたに他郷の土を踏んだことはなかつたさうだ。私の幼少の記憶にも、私の寢床の側に、祖母の寢姿を見なかつたことは、僅かに二度しかない。一度は讚岐の金比羅へ參詣した時で、一度は隣國のある寺へ參詣した時であつたと思ふ。二度とも、私をだまして戶外へ遊にやつた留守の間に、こつそりと脱けだしたのだが、金比羅詣の

讚岐の金比羅
仲多度郡琴平
町にある國幣
中社

折には、飴だの羊羹だのとどつきり土産物を持つて歸り、途中の話も面白さうに聞かせてくれたので、二三日のさびしさは忘れて、嬉しかった。しかしお寺詣の折には、祖母はその前の日に髪を落して讀經に耽り、歸つて來ても何一つ土産もくれず、賑かな話もせず、家の中は何となく陰氣で心細かった。法衣こそつけないが、尼姿となつた當分は、私どもも前ほど馴れ／＼しくするのを憚るやうであつた。

祖母は、面長で、色が白く、紅味としては少しもなかつたが、どことなく品があつて、尼姿がよく似合つてゐた。さうして村の者が、御隠居様は、お髪が多うて白髪もおありなさらんのに、といつて惜むと、いつそ、かうしてしまつた方が、さつぱり

してようございます。」と答へてゐた。

祖母は毎朝珠數をつまぐつて、看經をする。夜は手づから佛壇に燈火をあげて合掌して何やら呟く。春秋の彼岸とか、孟蘭盆とか、先祖代々の命日とかには、寺詣や精進を怠つたことはない。佛じみた催があると、きつと村の老婆連の先達になつて、鉦を叩いたり、御詠歌をうたつたりした。私はこの祖母の膝で、村の歴史も聞いた、昔噺も聞いた、いろいろの諺も聞いた。私は今になつても、郷里の事と此の祖母の事とは、どうしても忘れ得ないのである。

(正宗白鳥—白鳥集)

正宗白鳥
名は忠夫、小
説家

一〇 天使ルイゼ

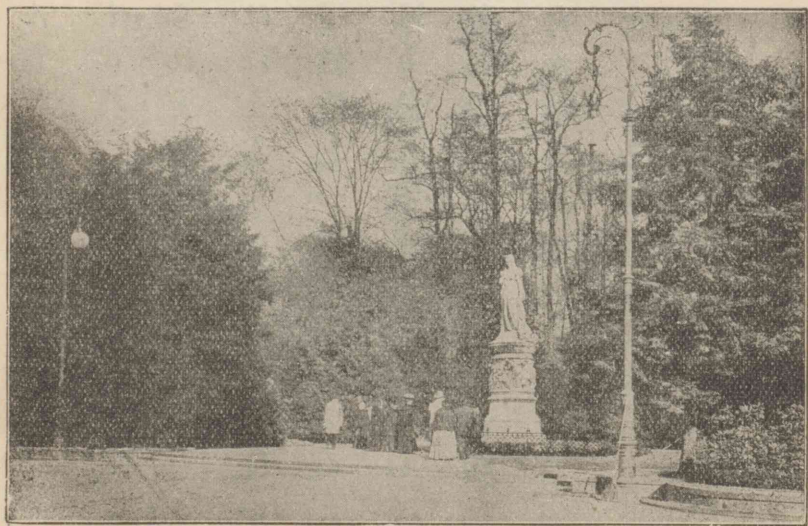
ドイツの首府ベルリン市の公園に、見るから神々しい貴女の立像が建てられてあります。凜とした姿勢、威厳と慈愛とを併せ備へた顔だては、見る者をして思はず襟を正させます。これはドイツ護國の女神と仰がれる女王ルイゼの像であつて、實に能く其の爲人と生涯の經歷とを物語つてゐます。

ルイゼはメクレンブルヒ、ストレリッツ侯の女で、千七百七十六年三月十六日に生れ、幼名をアマリエ、ルイゼと呼びました。六才の時早くも母に別れましたから、祖母のアルベルチーネ夫人の許に引取られて育てられました。恵み深

メクレンブルヒ、ストレリッツ
ドイツの北部にある州

く寛大な祖母は、稚いルイゼに自分の心ばせを吹込みましたから、只さへ伶俐で温順なルイゼは、益、その智識を廣め、慈善を施すのを樂みとする様になり、祖母はまたそれでいよく可愛くなつて、來客があるといつてもルイゼを挨拶に出しては、「宅の天使が」と、誇りげに吹聴するのでありました。しかし祖母の自

ルイゼの立像



慢は、少しも自慢ではありません、實際ルイゼに逢ふ人は、誰でも皆何となく柔かな尊い感じに打たれて、あゝ天使と思はず口の中で繰返さずには居られませんでした。

ルイゼの仁徳は、幼い時から現はれました。まだ十歳位の時、夏の日盛りに、祖母の召使の子供達と一緒に遊んでゐましたが、忽ち一面の黒雲が天に漲り、急に雷鳴電光が凄じくなりましたので、今まで夢中に遊んでゐた子供達は、皆顔色を變へて、我先にと遁歸りましたが、唯一人ハンナと云ふ少女ばかりは、置去りにされて、めそめそと泣いてゐます。ルイゼは不意の天變に少しも愕かず、皆の遁行く後姿を靜かに見送つてゐましたが、ハンナの泣いてゐるのを見ると、つ

とそのそばへ寄つて、泣かないで、此處に待つてお出でなさい。いまにお母様が入らつしやるでせうからね。」と、やさしく慰めの詞を掛けてや



りますと、ハンナは首を振つて、でもお姫様、私にはお母様がありませんもの。」「お母様がない？まあ可哀相に。では少しお待ちなさい、屹度お

父様が迎に入らつしやいませうから。」いゝえ、お父様も駄目で御座います。」

ルイゼは不思議さうに眼を光らせて、色々宥め賺しながら、その譯を尋ねますと、ハンナの父はもとルイゼの父侯に仕へ、何時も其の馬車の先に立つて、人よけをする役を勤めたのでしたが、その爲に或時脚を挫き、それきり一步もあるけぬ不具者になつてしまつたのだといふ事が判りました。ルイゼはこれを聞くと、すぐ侍女に命じて、ハンナを父の許まで送り届けさせた後、早速祖母の處へ行つて、今後は馬車の先拂を廢めて下さい。」とお願ひしました。祖母は、子供の云ふ事ではあり、且多年の習慣を、さう急に易々と廢める譯には行かぬと思ひましたから、様々に言聞かせましたけれども、ルイゼは一向承知せず、若しお廢めにならなければ、今

日からは決して馬車に乗りません。」と言張りますので、祖母も「天使には勝てない。」と仰しやつて、此の侯爵家だけは、此の後馬車に先拂を使はぬ様になりました。

天使ルイゼは年と共に、其の豊かな雙頬に、青春の血が溢れて來ました。丈なす髪は身と共に益、伸びて、眼の光、唇の笑、芳紀正に十八歳に及んで、あつばれ天使の高潔と、名花の艶麗とを兼備へた、堂々たる少女となりました。

この頃、ヨーロッパの空には、戦雲が漲つて居ました。當時の獨逸は、王侯が各、諸方に城を構へて、小さな國々が互に睨み合つてゐると云ふ有様で、フランスやイギリスなどのやうに、統一した強國ではなかつたのであります。その數々

ウイールヘルム二世
(1744-1797)

フランクフルト
名の町が二つあるのを、この河川をオーストリアの州境に引いた。この地方では、前記の

ウイールヘルム三世
(1770-1810)

ある小國の中に、プロイセンと云ふ國がありました。時の國王フレデリック、ウイールヘルム二世は、其の世嗣の王子の爲に、百方手を盡して、好い配偶を求めてゐましたが、丁度その頃、王はフランスに對する戰備の爲に、フランクフルトと云ふ町に出陣しました。この出陣中、王はルイゼを知る機會を得ましたが、同時に「これこそ」と、心にこれを王子の妃と選定したさうであります。斯くてメクレンブルヒ、ストレリッツ家のうら若い少女は、二十一歳の花盛りに、無邪氣な平和な處女生活を棄てて、フレデリック、ウイールヘルム三世の皇后となり、愛と恵、血と涙とを以て彩られた、かの女の活動の第一步を踏出したのであります。

であります。

(少女逸話に據る)

一一 和宮の御婦徳

維新政變の際には、西郷隆盛とか、大久保利通とか、岩倉具視とかいふ人々を初として、多くの英雄偉人が現はれた。英雄偉人は必ずしも男子に限つたものではないから、女子にも非常に偉い人が出たのは當然である。さうして、働いた方面こそ異なれ、その事業は決して男子に劣らないのであつた。和宮親子内親王の如きは、さういふ偉い婦人の中に數へまつるべき御人物である。

和宮親子内親王は孝明天皇の御妹君で、明治天皇の御叔母

西郷隆盛
鹿兒島藩士
(一八二七-一八七七)
大久保利通
鹿兒島藩士
(一八三三-一八七八)
岩倉具視
堀河康親の第二子、岩倉具慶の養子
(一八二五-一八八二)

家茂
紀伊侯徳川齊
順の子(五三六)

にあたらせられ、徳川第十四代將軍家茂の御臺所におなり
になつた御方である。我々は和宮の如き模範的婦人を、皇
族の中に見奉るのを、無上の光榮と信ずるのである。
徳川幕府が長い太平を續けて、漸く衰頽に趣いた頃、諸外國
が示威的に交際を求めて來たので、國內の議論がまち／＼
に分れて、幕府はこれを統一するに苦しんだ。そこで幕府
は、皇室の御威光を假りて、皇室と徳川將軍とは親睦一致の
間柄である事を天下に示して、その上で外交上の處分をし
ようと考へ、孝明天皇の御妹君たる和宮を、將軍家茂の夫人
にと、御降嫁を奏請した。宮は勿論この御降嫁を御望みに
ならず、天皇も一人の御妹を江戸へ御遣しになる事を御喜

文久元年
孝明天皇の御
代(五三二)

びにならぬ。併し天皇は、外交上の處分が圓滿に解決せら
れて、國內が太平になる事ならば」と仰せられ、宮は、國の爲と
あらば、何事も厭ひませぬ」と申し上げられたので、勅許にな
つて、宮は遂に將軍の御臺所として江戸へお下りになつた。
即ち文久元年御年十六の時であつた。
さて御降嫁の後、世の中は愈多事となつて、十四代將軍も
非常に多忙を極め、京都へ出張したり、大阪へ下つたりして、
江戸城に居られる日は少く、遂に慶應二年大阪城で薨去せ
られた。宮は亡き將軍の事を思ひ出で給うて、
みつせ川世のしがらみのなかりせば
君もろともにわたらましものを

慶應二年
孝明天皇の御
代(五三六)

みつせ川
一名三途川。
人が死んで閻
魔の廳に赴く
途に在るとい
ふ

と詠じ給うて、切なる思を述べさせられた。やがて御髪を切捨てて尼となり給ひ、靜寛院宮と申して、淋しい寡居の御暮しを遊ばされた。

その後時勢は幾度か變つて、慶應三年十月には、將軍慶喜は政權を奉還し、翌年正月には鳥羽伏見の戦争が起つた。慶喜は江戸へ逃歸り、官軍は江戸城の總攻撃をしようとして、諸方から江戸へ迫つたので、徳川氏の運命は風前の燈火の如き有様となつた。この時徳川の家をして全きを得しめたのは、主に靜寛院宮の御力によるといつても過言ではなからうと思ふ。宮は京都・大阪邊の騷は薄々御聞きになつて居たが、慶喜が俄に江戸城にかへつて宮に拜謁を願ふと、宮は

慶喜 十五代將軍。水戸侯徳川齊昭の第七子。大正二年、年七十七、鳥羽・伏見共、京都府紀伊郡に在る。明治元年、徳川慶喜の軍と薩長二藩の軍と戦つた此地の

慶喜の爲には先代の夫人だから、一方ならず御心配は遊ばしたものの、もしや慶喜に朝敵たる行があつたのならば、とても面會は許されないと、確乎として仰せられた。御年の若い寡夫人の御詞としては、何と凛々しいものではないか。然るに、第十三代將軍家定の御臺所たる天璋院夫人の執成もあつたので、漸く面會を御許しになつた。そこで慶喜も宮に鳥羽・伏見の戦争のあらましから、自分には朝廷に對して敵對する心は露程も無い事を申し開いて、是非々々京都に對して宜しきやうに御取扱を願ふと懇願せられたので、宮もそれならば、徳川家の一大事と思召されて、愈力をお入れ遊ばされる事になつた。

御身は皇室の御出でありながら、一度徳川氏へ降嫁あらせられた上は、徳川家一門と生死を共にせねばならぬといふ堅い御決心を遊ばされた宮の御心事が、深く察し奉られるのである。

(萩野由之讀史の趣味に據る)

萩野由之
文學博士、前
東京帝國大學
文學部教授、
大正十三年歿

一二 灯を見に

叔父さんたちの住む不動新道は、久松橋の方へ行けば人形町の賑かな道へ出られ、薬研堀の方へ行けば兩國の廣小路へ出られる所にありました。薬研堀に縁日のある晩などは、父さんは叔父さんについて散歩に出掛けました。そこへ行くのは灯を見に行くので

不動新道
日本橋區
久松橋
同區久松町と
浪花町の間
人形町
同區小傳馬
崎町から横に箱
至る道
薬研堀
同區
兩國の廣小

路
同區。兩國橋
の西のたもと

した。あの故郷の方の深い山の中で、夕方になると鼻が鳴き、父さんの生れた家からお隣の大黒屋までお風呂を貰ひに行くにも、提灯をつけて夜道を通ふやうな、そんな邊鄙な處に幼い日を送つたことを思ふと、眼の前にあるやうな明るい町を歩いて居るといふことすら、不思議な位でした。灯の数が多ければ多いほど、都會らしい氣もしました。灯を見に行くといへば、薬研堀の縁日にも増して賑かなのは、兩國に草市の立つ晩でした。その歸りに酸醬提灯を買つて来て、家へ歸つてから小さな蠟燭をつけると、五つばかりになる男の子が、あちこちと紅い灯を持廻るのも可愛らしいものでした。

しかし、何と言つても、兩國の花火の晩ほど澤山の灯を望むことはありませんでした。岸に灯、船に灯、橋の上に灯、——そこに何程の灯の色があるか、言つて見ることも出来ません。まるでそこらは灯の海です。黒山のやうに集つた男や女や、年寄や子供の間からは、「玉ーやあー」の叫び聲が湧くやうに起ります。

「しゅッ、しゅッ、しゅう。」

あれは花火の打ちあげられる音でした。やがて頭の上の方で、

「ポーン」

と一つ大きな音がするかと思ふと、柳の枝のやうに開いた

火が、夜の空に垂れ下ります。もうその花火もおしまひになつて、消えるかと思ふ時分に、

「バチ、バチ、バチ。」

といふ音がして、人をびつくりさせるのは、あゝいふ時でした。どうかすると、花火から花火が飛出して、提灯を空からぶら下げたやうに、ふわりふわりと人の頭の上を通ります。それが消えさうで、なか／＼消えなくつて、青くなつたり、紅くなつたり、さうかと思ふと紫色に變つたりするのを見上げて居るのも、楽しみなものでした。仕掛花火も消えてしまつて、やがてさびしくなるまで、父さんはそこいらを歩き廻りました。澤山あつまつた灯を望むばかりでなく、動いて

島崎藤村
現代の小説家
詩人

歸つて行く船の灯を見送るのも、花火の晚らしいものでした。
(島崎藤村—をさなものがたり)

一三 都會と田舎

都會と田舎とは何れが住みよかるべきか。この間に對しての答は、恐らく人によりて異なるべし。田舎にのみ住慣れたる人は、たま／＼大都會に立出づれば、その繁華と便利とに驚きて、或は何時までもここに居つきたしと思ふべく、都にのみ住める人は、又その反對に、或は地方の長閑けさを羨むべし。人はともすれば、他の境遇を羨むものなり。げに都會は繁華なり。街路は四通八達し、電信線は蜘蛛の

巢の如く、大厦高樓は鱗次櫛比す。夜も電燈の光晝をあざむき、車馬絡繹として行人たゆることなし。げに都會は便利なり。電信に電話にはた郵便に、其の送達迅速なれば、瞬くひまに、數十里數百里の外と通信し得らるべし。汽車あり、人力車あり、電車あり、自動車ありて、運輸交通の便そなはらざるなし。官廳あり、會社あり、銀行あり、學校あり、病院あり、劇場あり、公園あり、新聞社あり、百般の商店悉くありて、諸の實用、諸の娛樂、意の如くならざるなし。要するに、都會は華やかなりにぎやかなり、娛樂多し。都會の生活を人の羨むも宜なり。されどまた長く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多

く、物價貴ければ出費多く、交際しげければ萬事うるさきこと多し。世間は年中いそがしくさわがしく、街路は朝に晩に雑沓して、砂ほこり立舞ひ、空氣の不潔なること甚し。總じて傳染病などの流行は、人家稠密の地に始まる。都會が衛生上によろしからざるは明かなり。まして火災なども都會に多かるをや。都會には危険多しと云ふべし。田舎には都會の如き繁華もなく、又都會の如き便利もなし。されど其の生活の心安さと其の山水の清き眺と、其の人情の淳朴なると、其の空氣の清爽なるとは、田舎の良きところにして、都會には求めがたき賜なり。春の花見、わらびとり、秋の紅葉狩、茸狩、夏の涼螢狩、冬の雪景色の如きは、都會の人

の深く羨む樂みぞかし。

思ふに、都會の便利に代ふるに、田舎には長閑けさ、静けさあり。かれの繁華に代ふるに、これの心安さあり。いづれをまされりとも定めがたし。はでなる娛樂こそ田舎の住居には乏しけれ、自ら衛生的にして、又かの危険なきは、其の失を償うて餘りあるべし。

さもあれ、都會には絶えず文明の進歩あり、學問・藝術をはじめ、文明の利器機關は、總べてかしこに集りたり。田舎は全く之に反す。知見を擴め、技能を磨かんと欲する者、又は大いなる事業に従はんと欲する者は、到底田舎にのみ止るこゝと能はざるべし。此の點は都會をまされりとす。

坪内逍遙
名は雄藏、文學博士、作者

要するに、都會は修業の地なり、事業の地なり。安住・靜養の處としては、田舎の方はるかにまされり。(坪内逍遙)

一四 叔父の家

廊下の行きどまりになつた所の植込と藏との間の、打水で濡れた石の上へ並べられた下駄を穿いて、夾竹桃の間から、座敷に居る母にも一度聲をかけて、私たち三人が裏口へ廻ると、婆やと女中が風呂敷包を提げて立つて居る。生平の無地の帷子の上に、幅の廣い紺の前掛をした番頭が、大きいのが十四五つながつた鍵束の中から、一つ選つて、遠い奥藏の方まで響くやうな、ぎいゝといふ高い音を立てて、横町の

私たち三人
作者とその姉と妹

木戸を開けてくれる。

海船
堺市の一部

「また海船の濱へお供します。」

「さうですか。結構だすな。」

門に立つてゐる婆やと別家の妻とが、こんな言葉をかはす。私達は六軒筋へ曲る。高い酒屋の倉が兩側にすきまなしに建つて居て、日の影などのさしたことの無い、土も空気も濕りを帯びたこの細い道を、私達はよく通つて海船へ行つた。漁夫や舟子が澤山に住んで居て、氣の荒い海船は名だけ堺の中であつても、町の人にはまるで他所のやうに思つて居た。荒い言葉を使ふと、まるで海船の人見たいな。」と、すぐにお小言を頂戴するのが普通だつた。

叔父の家はその邊で一番大きい魚問屋で、淡路の由良あたりからくる鮪船を扱ふのが専門のやうであつた。

「おいでやす。暑かつたやうなあ。」

店の土間を通る時、帳場に居る愛相のよい叔父はこんな言葉をかける。奥座敷から庭の上にかゝつた廊下をわたつて離座敷に行くと、婆やはまだ庭から廻つて來てゐて、浴衣や軽い帯が包から出してあつた。町から此處へ嫁入つた叔母は、寂しさに堪へないので、泊りがけに來る私たちをどんなに喜んで迎へたかしのぬ。湯殿にはもう湯が立つて居た。湯殿へ行く縁に添うた石の多い庭に、河原撫子が澤山咲いてゐる。

湯から出ると、叔母は帷子の袂を咬へて、台所の外の井戸に下してあつた西瓜を重さうに上げて來た。

「よいさ、よいさ。」

と櫓太鼓の掛け聲のやうなことを叔母はいふ。私達は撫子の間に積んだ握りごぶしほどの石を持上げて、下から這ひ出る蟹を追ひ歩いた。一寸の間に眞鍮の化粧盥に、二三十の赤い蟹が這ひまはつてゐた。

泉水の上の廊下の手すりに赤毛氈をかけて、京の河原の涼みだといつて私達は喜んだ。

「まあ、好い景色だこと。あの塔は。」

「あれは八坂の塔ですよ。」

八坂の塔
京都市八坂寺
(法華寺)にあ
る塔

仁徳天皇の御陵

百舌鳥耳原中陵。土俗大仙和泉國泉北郡船

大文字山

京都の東山の一峯如意嶽

妙國寺

堺市北庄材木町にある

大和川

新大和川のこつと河内から出て堺の海に注ぐ

住吉

攝津東成郡住吉村。官幣大社。住吉神社がある

隣國 堺市は和泉國にあつて大和川を隔てて攝津國に隣して居る

與謝野晶子 現代の歌人、評論家

「あの山は。」

と仁徳天皇の御陵を指すと、

「ほ、あれは大文字山ですよ。」

と笑つた。塔は妙國寺のである。

暫くやすんでから、暮近く私達は大和川の川口へ涼みに行

つた。圓葉柳の下に居ると、強い蓬の香がした。河原の白

い砂に並んで青い水が流れて、水の中には斜に二三十本づ

つの杭が、ところ／＼に並んで居た。水の色の薄くなつた

ところは、もう海なのであらう。汽車が音高く川上を通つ

た。

昔からよく畫に描いてあるやうな松原の上の住吉の高燈

籠が、隣國である對岸の彼方に見えた。瀬の音と浪の音と

虫の聲とに送られて歸つて來ると、萌黄色の蚊帳が私達の

ためにもう吊られてある。酸醬賣、西瓜賣、氷屋の店が窓の

外の道に並んで、どん／＼と太鼓の音が聞える。和田の岬

に點る黄色の灯と、淡路島の赤い一つの火とが、寂しさうに

また、いてゐた。

(與謝野晶子 雲のいろ／＼)

一五 果物を贈る

暑ささびしく候折柄、御變りなく御暮しあそばされ、御嬉しく存上候。さて豫て臺灣に旅行致居候父事、昨日歸宅仕り、かの地の果物少々持歸り候ま、一籠御目にかかけ申候。中

に眞桑瓜のやうなる果物一個入置候が、是はパイヤとか
申し、最も多く南國の風味を有するもの由に御座候。か
の地の土人等が、碧梧のやうなる此の木の下に團欒して、此
の大いなる實を丸かじりに致候様子は、殊に趣あるもの
由に御座候。異郷の味御口には如何かと存候へども、御弄
びの料にまで御目にかけて申候。御納涼のお伽ともならば、
こよなき事に存上げまゐらせ候。かしこ。

右返事

仰の如く、此の頃の暑さ堪へがたく候折柄、皆々様お障も入
らせられず、御喜び申上候。さて御父上様には、ながくの
御旅行御恙なく御歸りあそばされ、誠に御目出度存上候。

はるくくと三千里の海を越えて、御持歸りあそばされ候果
物賜はり、有りがたく御禮申上候。昨夜涼しき月影の下に
て、家内縁側に打集ひて、籠を開き申候。何れもく、珍しき
果物のみにて、皆々取渡し眺め入りつゝ、暫しはたゞ打興じ
申候。中にもパイヤとか仰せられ候大いなる果物は、祖
父が頻りに所望仕候まゝ、まづこれに庖丁を入れ申候。さ
と薫る甘き香に、皆々喉を鳴らしつゝ、戴き申候。父は、類な
き柿の味のする。と申し、弟は、世界一の林檎はかゝる味にも
あるべし。など申し、祖父は、唯々蓬萊の仙果よ。と、無上に嬉し
がり申候。誠に舌の上にて、アイスクリームの様に溶けい
り申候て、口中皆香ばしく相成候味は、何と形容致しやうも

これなく候。半ば残しおき候をば、すそわけ致さんとして、祖
父は今朝早く叔母の家に出かけ申候。定めし今頃は、かし
こにても皆々舌鼓を打居候事と存候。いづれ近き中に御
伺ひ仕り、厚く御禮申上げ、ゆるく御珍しき御土産話をも
御伺ひ致度存候。
父母より御兩親様へよろしくと申出候。先づは御禮まで
一筆申上候。かしこ。

一六 夏の夜

はや黄昏の影寄せぬ

風おもむろに吹通ふ

みやこ大路の夏げーち

洗ひすそたる夕立の

たぐり柳に玉とあや

おぼ空高く月出でて

八百のちまたの隈もたぐ

照す涼しき夏の夜や

雲はしづかにさきまわりて
残る稀なる星のかげ

そぞろ歩きたに夜あけて

袂はおもしー露少か

月なぐめなる時計臺

二つの針のかさなりて

おつも高しー也時の数

傾きかゝる天の河

あふぎらて家路さゝりて行く

逍遙の群 あらもな

巻のあるどー今はたど

月の光と吹く風と

(土井晩翠一 曠鐘)

土井晩翠
名は林吉、第
二高等學校教
授

大森
東京府荏原郡
東京市外

大井

東京府荏原郡
北品川に接す
る町

鈴が森

大森町入不斗
八幡社邊を云
ふ、江戸時代
の刑場

八幡の濱

大森町八幡社
頭海濱、海社
水浴場がある

一七 田園の夏

家を大森の片ほとりに移してより茲に一年、四季ごとにか
はり行く鄙のおもむき、中にも夏ばかりめでたきはなし。
朝はまだきに起きいづ。風涼しく氣清ければ、自轉車に打
乗りて、大井・鈴が森の邊を走る。行人稀にして、舞ひのぼる
塵もなし。曉風身に泌みて、夏の半ばなるを覺えず。日麗
かなる時は、野草蹈みしだきて、行きて潮を八幡の濱に浴ぶ。
朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づら
を、彼方此方泳ぎまはりて汀に歸れば、水樓人晏くして、雨戸
繰る音始めて聞ゆ。
かへりて朝餐した、むるに、必ずしも膳羞を須ひず。紫深

き茄子の淺漬に、番茶の煮ばな香いと高し。食卓を圍むも
の、母と妻と二兒と、伊豆より來れる少婢と、これに某生と我
とを加へて七人なり。某生は夏期休業中、來りて我が家に
宿れるなり。
時餘りあれば更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑
に水を注ぐ。さるべき暇なき時は白麻の衣軽く着なして、
直ちに東京へ向ふ。八時十三分の汽車を待合はする人々、
大森停車場のプラットフォームに賑はし。知る知らぬ互
に目禮して、昨夜は暑かりし。など語り合ふ。流石に都離れ
たる様をかし。
晝少し過ぎて家に歸る。さと水を浴びて後、午餐の膳に就

く。清風徐ろに來る所、庭の櫺の影濃かなる所、遙かに沖なる白帆の行きかふを眺めて、何時とはなく夢に入る。覺めて後、日なほ高ければ、某生を促して海に入り、或は潮を浴び、或は貝を拾ふ。さては射的場の裏なる松林に入り、蟬聲雨の如きを聞きつゝ、休らふ。

偶、都より友の訪來るあれば、舟を僦うて灣内を漕ぎ、疲れて握飯を頬張り、澁茶に喉を濕す、その快如何ばかりぞや。歸りて拾へる貝を調べてもてなす、旨からずとせんや。朝の中に來べき八百屋の來ぬ折は、裏の手作りの芋を煮て客に饗すべし。

家の裏に十歩の空地あり。夏至る毎に、自然薯の蔓生ひて、

櫻の枝にわたり楓の幹にかゝる。天僅かに曇りて、暑さやや輕き時は、某生と共に赤裸々となりて之を掘る。掘り掘りて手も届きかぬるに至れば、大地に横たはりて、半ば頭を穴に埋めて掘進む。二尺ばかりなるもの二つを得れば、以て一家の食膳を充たすべし。乃ち泥まみれのまゝ、海に出でて洗ひ來る。歸れば薯汁既に成りて我を待てり。水を家の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひたる後、夕餐の膳に就く。朝餐に列なれる人の一人も缺けず。一日の務を終へて集りたる、嬉しからずとせず。日暮れなんとするに、風益、涼しく、氣愈、清し。東の障子明放ちたる所より見下せば、青々たる稻田のあなた、暮れゆく鈴

神明の森
在原郡入新井
村、作者の住
家は此の村に
在る

が森八幡の濱の家々を隔てて、白帆漸く消え、漁火次第に鮮
かなり。幼きものは少婢に伴なはれて、畔道にさまよひ出
でぬ。母と妻とは八雲琴など覺束なげに搔鳴らす。我は
庭の大樹にハンモック懸けわたして、のけざまに臥しつゝ、
縁に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば、星光愈明かに樹梢
を戦ぎわたる風殊に涼し。垣を隔てて往きかふ村人の取
繕はぬざれ言、手に取る如く聞ゆ。

夜更けぬれば、人聲やうく疎らなり。時には神明の森の
あたりを掠めて、杜鵑の鳴くを聞く。臥床に入りやせまし、
入らずやあらましなど打案じつゝ、書を読むに、燈火を慕う
て飛來る蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、その

杉村楚人冠
名は廣太郎、
東京朝日新聞
記者

外は名をだに知らず。
月出でたる又なく嬉し。光きら／＼と水に映りて、水際の
松林を離れ行く様のをかしきに、竊かに門を開きて憧れ出
づれば、同じ思の人のありてや、月下に横笛を吹きすさぶ音
など聞ゆ。
(杉村楚人冠——へちまの皮)

一八 由比が濱

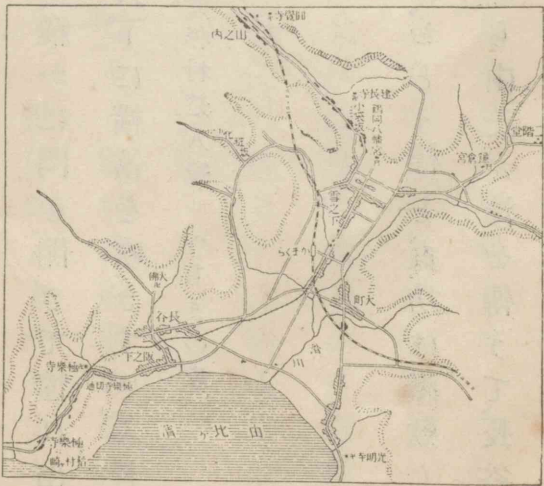
「まあ、たくさん海があるんだね、おとう様」と、貞坊は讚歎し
た。我等父子は、今、光明寺の前から由比が濱を傳うて、長谷
の方へ歩いてゐる。
「危ない、おとう様。ほら、ほら、波が寄つて來る。そして又

貞坊
作者の末子、
此の時四歳、
光明寺
鎌倉に在る、
浄土宗關東總
本山
由比が濱
鎌倉の南、稻
村が崎から材
木座に至る間

長谷 鎌倉町の西南
部、大佛観音
など名勝が多
い

滑川 鎌倉町の東部
を流れて由比
が濱に注ぐ

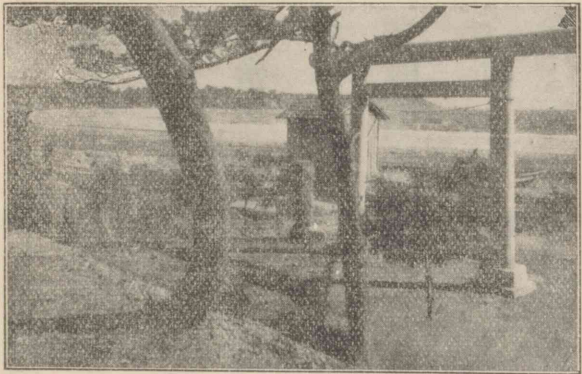
ひとりで行つてしまふ。」
 げに夕汐がどつと寄せて来て、ちよろくと足許に走りか
 かつて、あはや靴を浸さうとす
 る。渚遠く岸に避けて、行く行
 く貝を拾ふ。
 さて行きく、滑川の川口に
 達した。橋がない。對岸に一
 艘の小舟がある。髭の生えた
 人が二人乗つて居る。用あり
 げにも見えぬ遊覽の紳士と思はれるので、帽子を振つて便
 船を頼むと、快く承諾して、舟を此方にさし寄せた。さて中



青砥藤綱 北條時頼に
用ひられて引
衆となる

稲村が崎 由比が濱と七
里が濱との間
に突出してゐる

流で、件の紳士が鎌倉の榮華を説いて、我は青砥藤綱なり。」と
 名乗れば、謠曲式だが、さうは行かなかつた。



日は稲村が崎に落ちかゝる。東京
 は今電車が込合ふ頃だが、此處の砂
 路には、我等二人の影法師が長く印
 して居るばかり。夕風の水の面が、
 きらくくと眩しく輝いてゐる中を、
 白い禽が亂れて飛ぶ。

「大きいのは軍艦だよ、おとう様。」と、
 貞坊が沖の漁舟を指さして教へる。
 想へば鎌倉の規模は小さいものだ。此の故府の海岸線を

義經の兒
頼朝が安達清
に命じて海
に投げさせた

皇孫
本文は、明治
天皇御在世中
に作つたので
斯く申上げた
のである
迪宮殿下
皇太子、攝政
宮、御名裕仁、
今上天皇第一
皇子、明治三
十四年四月二
十九日御生誕
今上陛下
明治天皇

行盡しても、貞坊のかよわい脚でさへまだ疲れぬ。
あゝ思ひ出した、靜御前が生んだ義經の兒は、この海に沈め
られたのだ。何と云ふ酷たらしい頼朝だらう。其の反感
は後世皆義經に對する同情となるのだ。何時か學習院で、
尋常一年の生徒に、一番偉い人を舉げさせた事があつた。
幼い人達が各頭を絞つて、思ひくゝの答をした中に、皇孫迪
宮殿下は、義經と仰せられたさうだ。そして御殿にお歸り
になつた後、この事に就いて近侍の者に、實は「お祖父様」と答
へようかと思つたが、可笑しいから止めて「義經」と云つた。と
お話があつたといふ。今上陛下が無類の英主であらせら
れるのは申すまでもないのに、「お祖父様」と云ふのを御遠慮

朝比奈三郎
名は義秀、和
田義盛の三男
豪勇無雙の武
士

あつて、外に偉い人をお考へになつた皇孫殿下の御記憶に、
第一番に選び出された義經は、死してなほ餘榮ありと申す
べきであらう。靜御前も喜べ、海の藻屑となつた赤兒も喜
べ。
昔は此の濱邊に人家が軒を並べ、海には六十餘州の船が集
つて居たのであらう。朝鮮の船も宋の船も、やはりこの沖
に來たのであらう。この漠々たる白砂も、昔繁華の頃には、
今の品川、芝浦あたりの様に、塵埃で穢かつたかも知れない
北條から足利の兩時代にかけて、大分血も流された處であ
るが、今は政權に關係のない土地と變つて、こんなに綺麗に
なつたのだ。おゝ、朝比奈三郎が船に乗つて、行方知れず海

に浮んだのも、此の濱からだ。一體何處に行つたのだらう。朝鮮に行つたのだ。などと、書物には載せてあるが、或はアメリカあたりには漂流しなかつたとも限らない。アメリカ發見當時にあつた、メキシコ及び南米幾多の國々は、或は朝比奈の子孫の國かも知れない。アメリカの處々の博物館に、其の國々の遺物として、出品してあつた彫刻などに、芝居で見る朝比奈の顔の紅隈によく肖たものがあつたなど、たわいもない事を想ひ起した。

(澁川玄耳—日本と世界見物)

一九 心柄

心柄といふものは、ほんのちよつとした言葉のはしにもあ

澁川玄耳
名は柳次郎、
文章家

らはれるものである。

私の居た寺の坊さんに、ある時、銚子行の川蒸氣の話が出たをりに、

「此處から銚子まではよほどでせうね。」

と聞くと、

「いや、たいした賃錢でもありません。」

と坊さんが答へた。私は里數を聞いたのに、坊さんは大變なことを答へたものである。坊さんはこの一言で、自己が俗僧であることを私に知らせてしまった。

また、ある時、三人の男が膝を交へて坐つて居た。その時女中が、バナナを山ほどお盆に盛上げて持つて來た。そのバ

私の居た寺
作者は此の時
真間に滞在し
てゐた
銚子
下總國海上郡
利根川口にあ
る

ナナはまだ青かった。これを見た瞬間に、一人が、

「はあ、いゝな。」

といった。一人は

「駄目ぢやないか、青いな。」

といった。一人は

「全く小笠原のは値ばかり高くてね。」

と云つた。三人とも親しい友達だつたが、一人は畫家で、一人は商人、あとの一人はそのコーヒー店の主人だつた。畫家は其の時、色のかゝやきを見た。商人は味を感じた。そして其の店の主人は値を考へて、一緒にハツと思つたのである。この中の誰の心が、一番尊く磨かれてゐたか。

眞間
下總東葛飾郡
市川町の附近

またかういふ事があつた。

ある歌自慢の人が眞間にたづねて來て、私に「歌を見せてくれ。」といった。大概かういふ人の「見てくれ」は「教へてくれ」といふのではない。「驚いてくれ、褒めてくれ。」といふのである。私にはさういふ人の心持はよくわかつてゐる。「かういふのはいけないのだ。」といった處で、わからう筈はなし、先方にほんとに教はりたいと謙つた心が無い以上、私の方でもむきになつてやりこめる必要はない。

そこで私は、その人もさういふ人だと直ぐに見てとつたので、まあ、散歩でもして見よう。」と一緒に外に連れだした。歌の自慢などきくより、外へ出て雲でも見た方が、どれだけせ

いせいするか知れない。どうせ時間をつぶすなら、其の方がよい。その人は、途々何かしやべつてゐたが、私は夕方の空や、田園の景色にはかり眺め入つて居たのである。まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の堤の上を歩いて行くと、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。何をするのかと見ると——何といふ可憐な繪模様であつたらう。私は思はず立ちどまつてしまつた。其處には、鮮かな裏白の葉の河楊が、水の面に揺れてゐた。その撓んで揺れてゐる一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽留つて居た。又一羽來た。枝はいよく揺れる。枝の先は水へついて波を立てて居る。燕の子たちは、紅い頬

を揃へて、さもく恐ろしさうに啼きたてる。又一羽留ると、枝はいよく揺れだした。ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつて縋りついて居る。そのつやつやしい黒い裂羽、いたくしげな鳴聲。それだけでも可愛いの、また一羽、羽ばたいて、つい近くまではやつて來るが、枝の上の燕の子は、それを見て慌てて、「いけない、いけない」と鳴く。これ以上留つては、枝がすつかり水につかつてしまふのである。空の一羽は、とまるには留れず、寂しさうに鳴きながら、翔つては近より、近よつてはまた翔り出す。その燕に向つて、小石を投げたのである。私ははつとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持でほ

ほ笑みながら、私は何氣なく歩を續けた。さうしてある所まで其の人を送つて行つてから、

「左様なら。またお出でなさい。」

と別れた。歌はとう／＼見なかつた。見なくとも、もうどれだけの歌か分つてしまつた。無論、どれだけの歌をつくる人かもわかつてゐる。

何故か。

それはこの一事で、その人の心柄がまだ出來てゐないといふことが、はつきり私にわかつてしまつたからである。「心ができなければ、歌はできない。」

(北原白秋 洗心雜話)

北原白秋
現代の詩人

二〇 達磨の話

數年前に東海岸のある漁村で、私は楽しい一夏を送つた。そこには宿屋が無かつたので、私はある魚屋の二階を借りたが、その主人の乙吉は氣立の良い男で、毎日不思議な程いろ／＼に變つた魚を料理して、私に御馳走してくれた。ある朝のこと、乙吉が店で呼んで居る。降りて見ると大きな魴^{ほう}鱈^{たう}を料るところだ。あまり不思議な恰好^{がう}をしてゐるので、

「それが食べられますか。」

と私は尋ねた。乙吉は、

「へい、これを料理して差上げます。」

と答へた。乙吉はどんな問にも「へい」といふ深切と好意の籠つてゐる調子の語で答へるので、尋ねたものは忽ちに快い氣持でその答を聞いた。

それから私は、その店に出て見た。種々の物がある。一方には棚が何段となくあつて、乾魚や切昆布の包みや、草鞋と草履の束や、酒徳利や、ラムネの瓶までが載つてゐる。そして反對の側には、ずっと上に神棚があつて、その下には、達磨の載つた小さい棚がある。確かにその達磨は玩具では無かつた。前にはちやんと供物があつた。しかし私は達磨が家の神様となつてゐるのに驚かなかつた。日本では疱瘡にかゝつて居る子供のために、達磨に祈ることのあるの

を私は知つて居た。

けれども乙吉の達磨が特別の物であるので、非常に驚いた。その達磨は眼が一つしか無かつたからである。彼は大きな恐ろしい一つ眼で、鼻のやうに薄暗い店中を睨みまはしてゐた。それは右の眼で、左の眼は白かつた。

「乙吉さん、あれはどうしたのです。子供たちが左の眼をとつたのですか。」

「へい、へい。」

乙吉は俎板へ生々した大きな鯉をとり上げながら、氣の毒さうな顔でにつこりとした。

「初めから、あの左の眼は御座いません。」

「ほう。そんな風に出来てゐるのですか。」

「へい。」

とまた乙吉が答へた。その時、柄の細長い庖丁が、銀白の鰹の腹を音もさせずにすうつと通りぬけた。

「こちらでは盲目の達磨ばかり作ります。私があゝの達磨を買ひました時には、眼玉は御座いませんでした。去年大漁でしたので、あゝの右の眼を作つてやつたのです。私は餘り不思議なので、

「ではなぜ兩方の眼をつけてあげないのです。」と尋ねると、乙吉は又につこりと笑つた。

「ね、一つちや氣の毒ぢやないですか。」

「へい、へい。」

手際よく、桃色の肉と銀色の肉の薄い一枚々々を硝子の籠の上に並べながら、乙吉は答へた。

「また運の良い時がありましたら、其の左の眼も入れてやりませう。」

一枚の皿に美しいお刺身の料理が出来た。それから私は一軒々々、村の家の店や座敷を覗きこみながら通りを廻つたが、そこで私は種々と變つてゆきつゝある達磨を澤山見付けた。兩眼の無いのもあり、片眼しか無いのもあり、二つあるのもあつた。それにつけて、出雲の國では、この幸運に對する感謝を布袋に對してすることを思ひ

出した。出雲の人々は、何か感謝することのある場合には、安樂に袋にもたれた布袋の像が、柔かな蒲團の上に置かれる。そして授かる恩恵が増すことに一つづつ蒲團の數が増してゆく。しかし達磨では二つ以上眼をつけられないことに氣が付いて聞いて見ると、二つの眼と、いろくゝの供物が供へられると、其の達磨は眼の無い後繼者に席を譲つて片附けられるといふ事である。

日本にはこんな面白い小さい神が澤山ある。そしてこの不思議な小さい神を禮拜する人たちは、大概感心する程に正直だといふことを發見した。實際私自身の經驗では、神が質朴である程、人も益、正直であると信ずることは、正しい

と思ふものである。

私がこの村を去る前の晩に、乙吉は二ヶ月分の宿料の書附を持つて來た。そして其の勘定は無茶に安いものであつた。無論日本の習慣として、茶代といふものが拂はれるとしても、其の書附は途方も無く正直なものであつた。私は乙吉の好意の深い待遇を有難く思つてゐることを現はすために、其の書附の要求額を二倍にすることが當然と思つた。そして、其の二倍にされた金を手にした乙吉の満足は、全く自然で、又同時にしかつめらしい美しいものであつた。私は翌朝、早い急行列車にのるために、三時半に起きて着換をした。しかしこの早い時刻でも、温い朝食が階下で私を

小泉八雲
アイェルランド
生れの英人、
ラフカザオ、
ハイン。文章
家。明治三十
七年、五十五
歳

待つて居て、乙吉の娘の、小さい色の黒い女の子が、お給仕の用意をしてゐた。……で私が食事を済して、最後の温い茶の最後の一杯を飲んだ時、私の眼がふと神棚にゆくと、そこには達磨の前に燈明が燃えて居るのを見た。と一緒、達磨が私をまともに見下した、完全につけられた二つの黒い眼で。

(小泉八雲「こころ」による)

二 童謡二篇

野 菊

野菊の花を見てゐると
水の流れる音がする

野菊の原のくぼみには
泉が湧いて居りました

野菊の花を見てゐると
こほろぎの鳴く音がする

野菊の原の草の根に
虫がかくれて住みました

野菊の花を見てゐたら
雲が通つて行きました
空に浮んで行く雲の

影が花野に動きます

虫と泉の音のする

野菊の原はしんとして

雲の通つた大空は

いよ／＼青くなりました

石工

かつちん／＼石を鑿る

眼鏡をかけて石をきる

眼もとを据ゑて石をきる

汗を流して石をきる

かつちん／＼石を切る

石より堅い鑿の尖

のみより強い腕さきで

かつちん／＼石をきる

かつちん／＼日が暮れて

火花が見える鑿の尖

鑿の手もとは暗くても

かつちん／＼石をきる

島木赤彦
現代の歌人

(島木赤彦—赤彦童謡集)

二二 燈臺守

フランスの西岸に近き某の島に燈臺あり、マトローと云ふもの、これを守りぬ。或日マトローは燈臺に上りて、常の如く掃除をなし居たりしが、俄かに重き病さし起り、掃除半ばにして其の室に下り、そのまゝ床に就けり。マトローの妻は心を竭して夫を看護せしが、病聊かもおこたらず、氣息奄々として、死期の遠からざるを覺えぬ。醫藥效を見ず、頼むところは唯神のみ。妻はひたすら神に祈りぬ。とかくする程に夕暮は迫りぬ、黄昏の色は漸く海を蔽ひぬ。

病の床は離るべからず、床を離るれば、瀕死の夫を如何にせん、燈臺の燈は點ぜざるべからず、燈を點ぜずば、夜の船路のしるべを如何にせん。夕暮は益、深くなりぬ、黄昏は海を蔽ひつくしぬ。吾等の務なり、吾等の務なり、務は曠しうすべからず。妻は、かく思ひさだめぬ。かくて夫の病床を後に心引かるゝ身を起して、妻は燈臺に上りぬ。燈は明かに海上の闇を照せり、夜の船路のしるべとして、今宵も明かに海上の闇を照せり。妻は急ぎて夫の室に歸り、氣づかはしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何事を見し、最後の息は此の時絶えて、冷たき唇は見るゝ色を變じ行けるなりき。妻は顔を掩ひ

て、心ゆくばかり泣きぬ。

をりしも一人の兒驅來りて、燈臺の燈の回轉せざるよしを告げぬ。この燈臺は回轉式のものなるを、マトローの掃除中、機をはづしたるまゝ下りければ、さてはかく回轉せざるなりけり。

若し捨ておかは出入の船の見誤りて、如何なる椿事もや起らん、捨ておくべきにあらずと、妻は夫の骸を守りもあへず、直ちに臺に至りて機を装置せんとせしが、幾たび試みても、機は外れて依然として回轉せず。今はせん術なくて、年いとけなき二人の兒を呼び、其の小さき手もて、夜もすがら燈を回轉せしめぬ。燈は回轉しつゝ、海上の闇を照せり、夜の

船路のしるべとして、今宵も回轉しつゝ、海上の闇を照せり。悲しき一夜は斯くて明けぬ。この夜安全に島邊を航せし船は、唯常の如く明かに、常の如く回轉せる此の燈臺の燈を望みて、健氣なる妻と子との心づくしの如何ばかりなりしかを想はざりしなるべし。何ぞ知らん、明かなる燈光は、これ悲しき妻の真心の光にして、回轉せる燈影は、これいぢらしき兒等の夜の目も合せず務めたる丹誠の働なりしことを。

この夜のことは後に至りて傳へられ、世人は舉りて此の健氣なる行爲を賞揚し、幾多の新聞社は、此の誠意公に奉じたる母子のために義金を募りぬ。

藤井乙男
號は紫影。文
學博士。京大
帝國大學文學
部教授

鬼界が島
大隅の國の沖
合にある島、
僧の俊寛とい
藤原成經とい
平康頼との三
人が、平家を
滅すことを謀
つたので、清
盛に憎まれて
此の島に流さ
れた
少將
藤原成經のこ
と。丹波少將
といふ
熊野
紀伊國權現社。
熊野にあり、
今
國幣中社

あゝ、ありし一夜の燈は如何に清き光を放ちて、島邊の闇き波の上に影美しく輝きけん。
(藤井乙男)

二三 俊寛僧都

鬼界が島の三人は、毎日淋しく暮してゐた。少將と康頼とは、岩殿といふ小さな祠を熊野にたとへて、都へ歸るお祈をした。俊寛は色々理窟をいつて其の仲間にも加はず、ただ嘆いたり悲しんだりして、何の張合もない月日を送つた。少將と康頼が願をかけた其のはての日、例の祠に詣つて祝詞をあげると、風に誘はれて木の葉が二枚飛んで来て、一枚は少將の前に、一枚は康頼の前に落ちた。康頼の前に落ち

た葉には「歸雁」といふ二文字が蟲の食つた痕で現はれてゐた。少將の方のには「二」といふ字が食はれてゐた。これを合して見ると、「歸雁二」といふことになる。三人同じく流されて「歸雁二」とは怪しいことだ。誰か一人残されるのではなからうかと、互に心配しあつた。

すると次になぎの葉の廣いのが、何處からともなく飛んで来て、康頼の膝の上に落ちた。取つて見ると、

ちはやぶる神に祈のしげければ

などか都に歸らざるべき

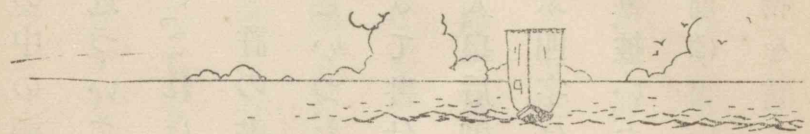
とあつた。そこで歸雁二とは少將と康頼のことであらうと思はれた。

二人は岩殿の御前を立つて、海岸へ出て來た。その日は空もよく晴れて、海も遙かに眺められた。遠い故郷を慕ひながら、沖の方を眺めてゐると、遙かの浪の中に怪しい物が見えて來た。ちつと見てゐると、それは船であつた。向ふの島の者が硫黄を取りに來たのかと思つてゐると、さうではなく、それは戀しい都の船であつた。二人は都のたよりを聞きたいものだと思つてゐたが、いよく船が近づくと、自分たちの變つた姿を見られるのが恥しさに、木陰にかくれてしまつた。俊寛も岩の間に寝てゐたが、何となく胸さわぎがして起上つた。そして二人の居る處へ走つて來た。やがて船は着いた。都の役人たちが多勢岸に上つた。そ

の中の頭だつた役人が先に立つて、三人の隠れてゐる方へ近づいて來た。

「これは丹左衛門尉基安と申すもの、六波羅殿から流罪お許の書付を持つて參つた。丹波少將に差上げませう。」
と云つた。三人はあまりの嬉しさに夢かとはかり疑つた。さて書付を開いて見ると、丹波少將成經平判官康頼法師二人、皇后御産の御祈の爲にゆるす。とあつたが、俊寛僧都といふ四字は書いてなかつた。俊寛は書付を卷いたり披いたり、披いたり卷いたりして、百度千度も見たけれど、自分の名前には書いてなかつた。餘りの悲しさに胸が亂れて、暫くは物を言ふことも出來なかつたが、暫くしてから、

皇后
高倉天皇の皇
后、清盛の第
二女平徳子



「三人同じ罪でこゝへ流されたものを、二人歸つて俊寛一人残るといふわけがない。これは筆の誤であらう。一しよに連れていつて下さいもし違つてゐたら又この島へ流し返されてもよいから。」

といつて頼んだが、書付にない人を連れて行くことはどうしても出来ないといつて、役人は聞入れなかつた。そこで俊寛ばかりは取残されることになつた。俊寛は少將と康頼との袂を取つて、

「三人で居ればこそ、こんな淋しい島にも少しの慰めはあつたのに、今から唯一人どうして残る

ことが出来よう。三年の間同じ島に住馴れたものを、今私一人残して都へ歸り上られるのか。あゝ、名残惜しい、名残惜しい。」

といつて泣きくづれた。二人も尤に思つて、いろくゝ慰めてやつた。康頼はお經を、少將は夜具を形見に残した。船頭どもは、風の都合がよい、早くくゝと急ぎ立てた。そこでいよく、俊寛を一人残して、舟は纜を解いた。俊寛は舷に取付いて一丁餘も出ていつたが、



鹽水が目や口へ入るので、舟を離れて岸に歸り、倒れ伏しては起上り、起上つてはちだんだ踏んで泣倒れた。幼児が母を慕つて泣くやうに、その泣聲は遠く波間をわけて聞えて來た。少將も康頼も哀れに思ひ、眼は涙にくもつて、行く先の空も見えなかつた。

(源平盛衰記による)

源平盛衰記
源平合戦のこ
とを書いた軍
記物語

二四 舊 師

昨日は父に連れられて、楽しい旅をしました。それはかういふ譯だつたのです。一昨日の夕飯の時でした。父は夕刊を見て居ました。が、不意に聲を立てて、

「おや、もうとうに亡くなられたと思つて居たのに、私の尋常一年の時のクロセテイ先生が、まだ生きていらつしやるのだよ。さうね、たしかもう八十幾つでお出での筈だ。六十年も學校に出てお出でだつた。あゝ、あの先生がお達者で、コンドフにいらつしやるとは知らなかつた。丁度いゝ、明日は休だから、お前と一緒にを訪ねしよう。」と言ひだして、その晩中、父はその先生のことや、自分の小さい時の話ばかりしました。

「さうだ、私の教はつた時は、先生は四十位だつた。今でもはつきり覺えてゐるよ。背が高くて、少し前屈みで、眼が鋭く、鬚を奇麗に剃つて居られた先生だつた。偉い親切

な先生でね、お前の御祖母さんなどは、非常にあの先生を尊敬していらつしやつたものだよ。何時、コンドフにお出でになつたのだらう。さうさ、もう私を覚えてはいらつしやらないだらうな。でも好い、私は覚えて居る。もうお別れしてから四十四年になる。四十四年だ。ね、明日お前と行つて見よう。」

と、父は急に尋常一年生になつたかと思ふほど、いそ／＼と喜んで居りました。私もその一夜は、遠足の前夜のやうな嬉しい心地で胸が一ばいでした。昨日は、朝の九時に町の停車場に参りました。コンドフまでは僅か一時間ばかりです。好い天氣で、汽車は、美しい緑

の野を横ぎつたり、青葉の香る雑木林を走りぬけたりして参りました。父は嬉しさうに窓の外を見ては、まるで友達にでも話すやうに、

「あゝ、も少しで先生に逢へる。私は先生の戒の言葉は未だ忘れずに居る。よい先生だつた。悪いことをしてひごく先生に叱られて、しょんぼり家まで歸つた事もよく覚えて居る。先生の手は大きくごつごつして居た。何時も同じやうに、靜かに教室に入つて来て、隅にステッキを置いて、釘に外套をかけて、どんな日でも同じやうな柔かい顔附で教壇にお上りになつた。今でも先生の聲が耳に響いてゐる。アルヘルトさん。人差指と中指とを、

かうしてペンにかけるのですよ。」かう仰つた。四十年もたつたのだから、先生も随分變られたに違ひない。」父は汽車中私に向つて話しつゝけました。

コンドフに着いたら、先生のお家はすぐにわかりました。私たちは淋しい田舎町をずつとはづれて、生垣に花の咲いてゐる小路を左に曲りました。父は物も言はず、昔のことに思ひ入つてゐるやうでした。時々微笑んでは頭を振つてゐました。

と、突然、父は立止りました。

「あ、あの方だ。先生に違ひない。」

小路の向ふから大きな麥藁帽子をかぶつた、丈の高い老人

が、杖によつて小さい阪を下りて來ます。足をひきずるやうにしながら。

「たしかにさうだ。」

と父は繰返しながら足を早めました。父が老人の前に立止ると、老人も立止つて父を見ました。髪は眞白ですが、柔和さうな顔は靜かに赤ばんで、眼は生々と光つて居ました。長い眉も眞白でした。父は帽子をとつて、

「あなたはクロセテイ先生ではいらつしやいませんか。」と尋ねました。老人も帽子をとりました。

「はい、左様です。」

「あゝ、それぢや、御免下さい。私は昔、先生から教へて頂い

た生徒で御座います。先生はいつも御達者で、まことに結構でございます。私はお目にかゝりたくて、今日チューリンから参りました。」

老人は驚いて、父を見つめました。

「それはどうも、有難う。一寸分りませんが、あなたは何時頃の生徒でしたかね。失禮ですが、お名前は。」

「御記憶なさらぬのは御尤です。でも私はよく先生を覚えて居ります。アルベルトで御座います。」

と、父は其の時分の學校や、自分の處を申しますと、先生は、じつと首を垂れて考へて居られました。そして二三度父の名を口の中につぶやきましたが、急に顔をあげて眼を大き

く見開いて、

「アルベルトさん。お、さうく、技師のボチニーさんのお子さんですね。コンソラタ町に住んで居られた——」

「それで御座います。」

と父は手を差出しました。すると先生は大きな手で、しっかりとそれを握りながら、

「さうでしたか。御免なさい。」

と仰つたが、それからお住居に案内されました。

二五 舊 師 その二

クロセテイ先生のお住居は、前に花園のある小さな家で、中

に入ると、壁は白く塗つてある小綺麗な部屋でした。片隅に小さな寢台が一脚、いま一方の隅に卓子と書棚があつて、壁には古い地圖が掛けてあります。椅子が四脚、小さな卓子を圍んで居て、窓からは美しい日の光と共に、草花の匂が高くかをつて参りました。

先生は、日差しの美しい床を見つめながら、

「アルベルトさん。あなたの事はよく覚えてゐますよ。あなたのお母さんは大層よいお方でした。あなたは一年の時は、窓際の左側に腰をかけて居たのでしたね。待つて下さい。さうく、あなたの縮れた房々した髪が、今でも眼に見えます。」

と話しながら、又暫く考へて、

「あなたは活潑でした。二年の時、随分ひどく咽喉を痛めた事がありました。暫くたつて、瘖せて、外套にくるまつて學校に出て來ましたね。よく覚えてゐて下さつた。有難い。よく昔の生徒が尋ねてくれますがね。」

と先生は懐しさうに話を續けられました。そして父の職業や、私のことを尋ねながら、

「私は本當に嬉しいです。もう此の頃は、暫く尋ねてくれる人が無かつたのです。もうあなたが一番お終ひかもしれません。」

と瞼をしばた、かれました。

「そんな事は御座いませぬ。先生はまだ御元氣です。」
と父が申しますと、

「いえ、御覽なさい。もうこんなに手がふるへます。三年前からかうなりました。あ、あの日の事は忘れません。私は、始めて生徒の筆記帳にインキを落したあの日の悲しさは忘れられません。最後の授業は、それから程なくでした。今の仕事といふのは、昔の學校の本を繰返して見たり、日記を讀んで見たり。さうです、私の全生活が其の中にあるのですから。」
と、書棚を指されました。そして急に快活な調子になつて、

「お、あなたの驚くものがありますよ。アルヘルトさん。」
と先生はそゝくさと立つて、書棚の下の戸を開いて、紐で結いた幾つもの紙束をひろげ出しました。その紙束には一年月が記してありました。あちらをかへし、こちらをかへしして、漸く先生は、一枚の黄色になつた紙をぬきとつて、それを父に渡されました。それは四十年前の父の成績でした。

上の方に、書取千八百三十八年四月十八日、アルヘルト、ポチニ。」と書いてあります。父は、その大きな子供らしい字があどけなく一ばいに書いてある紙を手にもつて、笑みかたむけて讀んで居ました。が、すぐに其の眼に涙が浮んで來

ました。

「父さま、どうなすつたの。」

と私がきゝますと、父は片方の手に私をかき抱いて、

「ほら、ね、この紙を御覽よ。これは私のお母さんが直して下さつた所です。そして一番しまひの行はね、すつかり書いて下さつたのだよ。私が疲れて眠くなると、宿題が出来きらないのを心配して、お母さんは、いつも私の字を眞似して書いて下さつたものだ。」

と、その眼を涙の中に光らせました。

先生はにこ／＼して、この話を聞いて居られました。

「御覽なさい。これは私の記念です。私は幾年たつても、

子供たちから離れません。この中に昔の生徒が皆入つて居ります。あゝ、眼を閉ぢると、その一つ一つの顔が見えるやうです。よく覚えて居ます。私を喜ばした子、私を悲しませた子、みな忘れません。悪い子供もありました。しかしもう私には、其の悪かつたのも善かつたのも、一様に私の可愛い、生徒です。」

と仰しやいました。

父は笑ひながら、

「どうです。私も悪戯を致しましたでせう。」

と申しますと、

「あなたですか。」

と老先生は笑ひながら、

「いや、覺えては居ませんが、しない方でも無かつたでせうね。あなたは餘程利發でした。お母さんが大層あなたを可愛がつて居られたことを、よく覺えて居ます。本當に今日はよく訪ねて下さつた。」

すると父は、

「先生、私は、母に連れられて、始めて學校に出た時のことを覺えて居ます。母は、私を三時間も離して置いたのは、あの時が初めてでした。私も辛かつたので、窓の所で母に分れた時は、目に涙が一ばいでした。その時、先生が手招きして下さいました。先生のその時のお顔は、母の胸の

中をよく見ぬかれて居られるやうでした。私は安心して先生のお手の中に飛込みました。あの御様子は、永久に私の胸に彫りつけてあります。私を今日、こゝまで引出したのも、其の記憶なのであります。」

先生は何も言はれませんでした。慄へる手で私の頭を撫でられました。その手が額に、額から肩にと落ちました。先生は非常に満足して居られました。それから私の家の事やら、先生方のことやら、父の友達のことやらを面白さうに話しました。その話は盡きさうもありませんでした。父は先生をお招きして、町に出て午飯を一緒に戴きました。私たちが歸らうとしたのは二時でした。先生は停車場ま

で見送るといつて、私の手を引いて下さいました。父は、そばからお助けするやうに、添つて歩きました。停車場では汽車がもう出ようとして居ました。父は私を客車に押し入れて、汽笛の鳴る間際に、先生の手から古い杖をとつて、

「先生、これは今日の記念に頂いておきます。」

といつて、自分の、銀の握のある、名前の頭字を彫りつけたステッキをお渡ししました。

汽車は動きはじめました。先生は父のステッキを辭退しようとなさいましたが、もう父は乗つてゐました。

「左様なら、先生。」

「左様なら、今日は有難う。」

「又お目にかゝりませう。」

父が窓から言ひました。先生は少し頭を振られました。父は又追ひかけるやうに、

「いえ、きつと又御目にかゝります。」

と申しました。帽子を高く差上げた老先生の姿は、その刹那にどん／＼と遠ざかつてしまひました。(愛の學校による)

愛の學校
イタリヤの作家
ド・アマミチ
スのクオレンの
三浦修吾氏の
譯したものを

二六 運動會の前

學校から歸りますと、まだ弟は居りませんでした。午後の日影の具合で、慎ちゃんの歸つて來る時刻はわかつて居ます。

もう歸る時分だのにと思つてゐる中に、慎ちゃんの笑聲が、家の前から響いて來ます。大分はしやいだ笑聲です。私はそつと二階の勉強室の障子を細目に開けて、のぞいて見ました。

カバンを肩からはづした弟は、友達の清ちゃんと話しながら、しきりに笑つて居ます。

「二十六日だよ、運動會は。それまでに、清ちゃんも運動服を拵へてお貰ひな。僕も拵へて貰ふよ。一緒に着て行かうよ。」

と弟が言ひます。

「拵へて貰うとも、ランニングの方では、二年男では慎ちゃ

んが一等賞だよ、屹度。手帳をうんと貰つたら、僕にも一つおくれよ。ね、君。」

清ちゃんが物を貰ふやうな手つきをして見せる。慎ちゃんほうなづいて見せる。

「屹度だよ、慎ちゃん。大丈夫かい。」

「大丈夫だよ。」

といつて慎ちゃんはひろげて居る清ちゃんの手に、自分の兩方の手を載せて、物をやる眞似をしました。

「ハハハ……。」

「ハハハ……。」

二人は板扉の前で、しばらく何か話しては笑つて居ました。

「二十六日だよ。宜いかい、慎ちゃん。」

清ちゃんは、空に二十六と書く眞似をして見せました。慎ちゃんは、またうなづいて見せて、美しい澄んだ聲で笑ひました。そして、

「失敬っ。」

といひさま片手を舉げて、清ちゃんを見送りながら、家の中に飛びこんで來ました。

「お母さん、たゞ今……」

といふ慎ちゃんの甲高い聲が、台所の方で聞えました。

晩飯の後で、慎ちゃんの騒ぎやうといつたらありませんでした。二階の勉強室から下の部屋々々まで走り廻つては、

幾度かお父さんやお母さんに小言を言はれました。そのたんびに、弟は、

「だつて、二十六日のランニングの練習なんだもの。」

とかはいゝ、眼を輝かせました。

「幾らお前が走つたつてびりさ。」

と、お父さんがからかひました。

「ふうーん、ランニングなら何時でも一等ですよ。」

と、慎ちゃんは、細い脚を出して見せます。

「まつたくですよ、慎は走りつこならいつも一等ですよ。」

お母さんは眞面目な顔をして仰しやる。

「他に能が無いからさ。ハハハ……」

私は思はず、

「まつたく巧いんですよ、こんな具合でホ、ホ。」

と、弟のランニングの眞似をすると、お父さんも弟も一緒に笑ひ出しました。私もお腹の痛いほど笑ひました。

吉田絃二郎
現代の文士

(吉田絃二郎氏の文による)

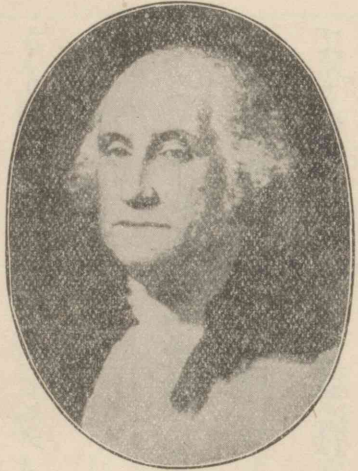
二七 メーリー夫人

母が子の爲に盡し、又は勤儉の徳を守つた例は、古今東西に少からずあるけれども、その子の性行が非凡で、成績が偉大であつた爲に、賢母の名が全世界に轟いたのは、北米合衆國第一代の大統領ジョージ・ウォシントンの母メーリーである。

ウォシント
ン
バーヂニヤに
生る、北米合
衆國の國祖と
稱せらる
(1782-1799)

る。

メーリーの言行には、婦人の模範とすべきものが甚だ多い。こゝに記すのは勤儉の行である。メーリーは、子のウォシ



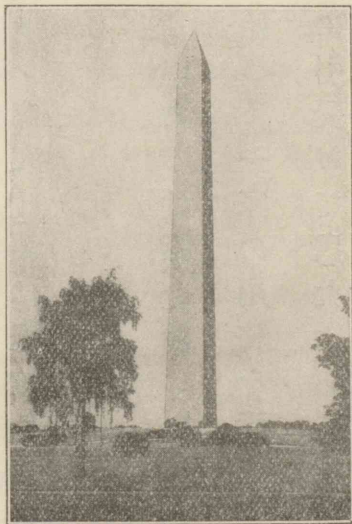
ウォシントン

ントンが大統領の榮位に居る間も、やはり元の通り農家に住んで、作物の世話、金錢の出納から始めて、一家の用務を悉く一身に引受けて居た。ある時は

馬を驅つて田畑に至り、ある時は作男を勵まして收穫にいそしみ、常に粗服を着て、質素な家に立働くさまは、とても大統領の母とは思はれない。かつて或人がメーリーに向つ

て、あなたの御子息は、一國の元首でいらつしやるのに、あなたは少しの樂みをもなさらず、常に儉約を事として、かやうにお働きのようになりますが、もう少しはお休みなされてもよさうなもの。」といふと、メーリーはほゝゑんで、「いやいや、ジョージは大統領ですから、職務相當な生活をして、も宜しいが、私はやはり農家の老婦です。田舎者は田舎相應の動作もし、生活もせねばなりません。その上ジョージも、永年、難儀な戦争をしたり、面倒な政治にあづかつたりして居たことですから、今

柱念記のントンシオウ



にも首尾よく職を辭して、故郷へ歸つて來た時には、少しは休息もさせてやりたいと思ひます。それには食物衣服に事缺かぬやうに、多少の貯蓄もして置かねばなりません。又この村から大統領が出て居るといふのに、貧乏で官の厄介になるやうな村民があつては、濟まないと思ひますと、傍ら、私の収入の中から、分けて惠んでやる必要もありますから、中々一日も遊んでは居られませぬ。皆も能く働いてはくれますが、やはり老人の眼が脱けますと、穴があいて損が立ちますから、休んでは居られませぬ。」といつて、働き續けた。かくてメーリーは、八十餘の高齡に達するまでも、猶勤儉を守つた。何と感心なことではないか。その子が冠を掛け

て還る早々働かすのも氣の毒ゆゑ、少しは貯蓄して置いてやらねばならぬとは、誠に有難い心がけ。ウオシントンの官を辭すれば聊かの未練もなく、直ちに鋤を取つて、山野に耕すと云ふ氣高い志は、一つは此の母の實踐躬行の感化である。かやうな賢母の家庭に薰陶されたのでなくては、とてもウオシントンのやうな神聖な俊傑は出来る筈が無い。果してウオシントンは、職を退いた後は、この田舎家に引きこもつて、賢明な母、貞操な妻と共に、質素高潔な生活に平安な餘生を送つた。「此の母にして此の子あり」といふべきである。

(下田歌子—女の心得)

下田歌子
私立實踐女學
校長

二八 人の運

運は傍觀する人を去つて、奮闘する人に來る。世には碁を打ちて、負くれば腹が立つとて、自らは碁を打たずに、唯見物して樂しむ者あり。岡目八目、その手は悪し、あそこはあゝ、打つべし、などと、口ばかりは上手なれど、力量は一向になし。これにては、十年傍觀しても、二十年傍觀しても、碁に上達すべくもあらず。碁の如き遊戯はそれにて可なれど、人生にも往々傍觀的態度を取るもの多し。實行の如何を考へず、たゞ大言壯語し、人の爲したることを非難し、高慢なる事、生意氣なる事を言ひて、以て自ら衒ひ、知つた風を言ひて、以て自ら高しとする様なる連中には、運は向いて來らざる

べし。失敗は成功の基なり。好運を得んと思ふ者は、自ら人生の渦中に投じて、奮闘せざるべからず。高見の見物は不可なり。彌次馬となりてわい／＼騒ぐとも何の得る所あらんや。勝海舟壯時西洋式の兵術を學びけるが、一書肆の店頭を過ぎしに、舶載の兵書あり。當時得難き良書なり。其の價を問へば、五十兩なり。といふ。海舟これを購はんと欲すれども、家貧にして、直ちに五十金を辨ずる事能はず。十數日間苦心慘憺の結果、漸くこれを調へ、書肆に行きて購はんとすれば、既に他人に購はれし後なり。海舟遺憾に堪へず。その人を問へば、四谷大番町に住する與力某なり。といふ。乃ち其の家に到り、情を陳じて讓與せられたしと乞

四つ時
今の午後十時
頃

ひしに、與力聽かず。借覽を乞ひしに亦聽かず。海舟曰く、晝の間は足下に必要あらん。されど夜間寢に就くの後、我に貸しても可ならずや。と。與力止むを得ずして曰く、四つ時を過ぐれば貸しても可なり。されど戶外に持出すことを許さず。と。海舟茲に一縷の光明を見たり。翌夜より其の家に赴く。當時海舟は本所の錦絲堀キンシホリに住めり。四谷大番町を距ること一里半もあり。然るに海舟は風雨と雖も休まず、又一夕も其の刻を誤らず。斯くの如きこと半歳餘、終に八卷の兵書を悉く手書することを得たり。與力に向つて其の厚意を謝し、且寫本を出して、二三不審の點を擧げてこれを質す。與力感歎して曰く、僕謄寫の勞なくして、

未だ通讀するに至らず。實に慚愧に堪へず。請ふ、此の書を足下に呈せん。」と。海舟固辭すれども聽かず、終にこれを受けたり。與力は運を傍觀せるなり、海舟は奮闘して運を拾へるなり。

(大町桂月—人の運)

大町桂月
文學士、文章家

二九 笑 の 話

昔から、笑ふ門には福が来る。といふ諺があるが、この諺が眞實であると共に、福の來た家から笑ひ聲が出る。といふ事も亦眞實である。普通の意味に於て、笑は喜の表出である。誰でも心に嬉しい事があれば、につこりする。嬉しい事は即ち廣い意味で云ふ福である。そして又かういふ表出の

多い人の處には、益、嬉しい事が寄つて來る。そこで益、笑ひさゝめきが多くなり、それが原因で、更に福が寄つて來るといふ様に、笑と福とは互に因となり果となつて、絶えず相伴なふものである。

人の、喜び、祝ひ、笑ひさゝめく時に、苦い顔や澁い顔をして居る人は、必ず特別に何か面白くない事、苦しい事、腹の立つ事、すべて喜を打消す事情が存するのである。さもなければ、生れついでの不景氣、到底人氣を集めて、人に可愛がられ慕はれ仰がれる事の出來ない氣の毒な人である。笑は人類にばかり許された表情の特權である。この特權を捨てて、何時も佛頂面をして居るのは、訪ねて來る福の神を追返すや

うなものである。
とりわけ女の笑には、自分自らの運命の鍵があるばかりでなく、他人殊に男性の心を支配する無限の力がある。西洋の學者も、女の笑ほど男の心を動かす強い力はないと説き、大の男が終日奮闘して、怒り、悶え、苦しみ、悲しみ、種々雑多の感情に疲れ果てて歸つた時に、出迎へる妻の微笑に、これら不快の分子はさらりと融けて、春の淡雪の跡を留めないやうになるといふてゐる。

斯様に、優勢強力な武器にも譬へるべき笑を、生れながらに具へ持つた女性は、天の恩寵の深い者と云はねばならぬ。

(高島平三郎「婦人の爲に」)

高島平三郎
心理學者

三〇 祭禮に人を招く

此暑さ少く薄らぎ申候みなく様事
もなう此の夏中さ此過し遊ばされ様
嬉しうも申に承り何りの事と存上
きてこそと氏神様祭禮毎年大暑の
最中より行はるまゝの處今年は
如何にも烈しき暑さの上に悪しき病さ

へ流行つた。くく用心つた。居りゆ折
 か。山車屋臺は病氣蔓延の種にもや
 と其の妙法やめになり居りゆひ。が此の
 頃の秋氣にもはやさまで心配もなかつ
 べ。と明後日より二日間神輿の後御も
 此の由山車は其の數十本地走りなど
 の催もそれあり。く封じ。あられ
 餘波一度に賑け。せん氏子中の意氣

と相見え。此の町内より山車出で
 飾物なども出来ゆ。今あたより青
 糸の手すり。結ぶもあり。山車少屋の
 一つ。へなど。大路に。はひ申ひ。か。る賑
 け。き。第。様。方。の。出。覧。に。つ。れ。た。く。必。ず。混。雑
 の。中。に。は。山。車。申。す。ま。り。く。山。車。夜。宮
 より。か。け。て。出。立。り。が。け。に。出。立。で。下。さ。れ。た。く
 出。立。び。相。手。な。る。べ。き。子。供。等。も。五。人。は。な。り。

べ〜棧敷振へは待申上まか〜こ

樋口一葉
小説家、明治
二十九年歿、
二十五歳

(樋口一葉一通俗書問文)

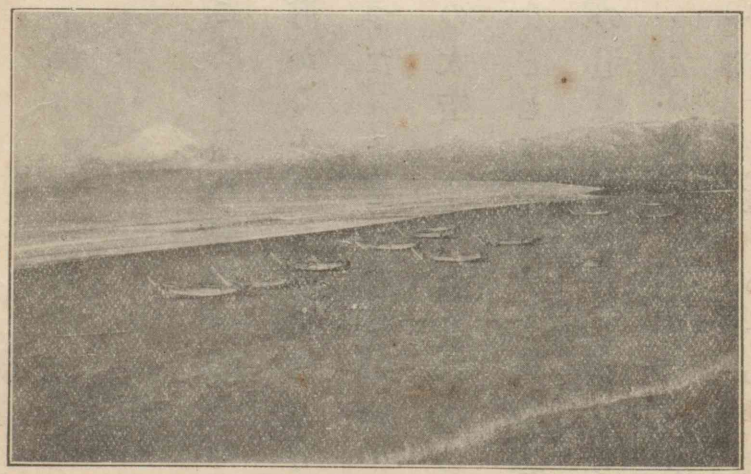
三一 砂山の幻

鋭い白日の光と、強烈な濃藍色とに眼を刺されるだけに、夏の海邊の生活は、淋しい秋に入つても、ながく〜網膜の底にと〜まり、折々蕭殺たる風の音などに紛れて浮び出でくる。私の詩集「砂金」の中に「砂山の幻」と題する、かうした夏の追憶を歌つた小品がある。

濱 槿
水邊の砂中に
生ふ蔓の如き
閉灌木。碧花を
開く

砂山をくだりゆく
白きボンネットを
われは見たり。
七月の日は輝き
磯には濱槿の
花のむらさき。
朝、ふと眼に浮ぶ
白きボンネットのそのかけ、

作者のうへる片瀬の砂丘



秋されば、かの磯邊に

風も寒からむ。

私は十五六の年から、大抵毎年、夏には片瀬の海岸へ行つた。遊泳が下手なので、誰よりも先に海から上つて、砂山のかげに寝ころんでゐるのが好きであつた。そこで私は仰向けになつて、さら／＼する白い午後の大空を眺めたり、砂山の上下を通る人の足音を聴いたりなどして、いろ／＼の空想に耽つた。この詩も、さうした折の追憶で、寝ころびながらふと見ると、遙かの砂山の頂に、白い女の子のかぶるボンネットが見えたのである。勿論帽子だけで、遠くのその主は

誰とも知るよしもない。たゞその白い色が強く私の眼を刺した。私はあてもなく、その白い帽子が砂山を下つて、此方へ来るのを待つてゐたやうな氣がする。その時、ずつとあたりを見まはすと、近くの磯には人影もなく、たゞ濱槿の花のむれが紫色に咲いてゐた。

この折の、ほんの瞬間の印象があるうすら冷い秋の朝、ふと東京の自分の室の机のほとりで眼底によみがへつてきた。「あ、秋になつたが、今頃はあの海邊にも、寒い風が吹いてゐよう。」と私はつぶやいて、そ／＼に襟元をすくめながら、花やかなパラソルや、白いボンネットが、さかんに往來したあの熾烈な夏の日の磯邊のことを回想したのである。私のこ

の詩は拙いが、その折の追憶だけは今でも限りなく懐しい。

(西條八十—詩の味ひ方)

三二 ボチ その一

私は元來動物ずきで、別して犬は大好きだから、近所の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と母が寝がへりを打つて、こちらを向いた。私は此の返答はさしおいて、

「あれは白ちやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて……誰か、棄て、いつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄て、いつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人か、犬を棄て、いつたと、私は二三度反復して見たが分らない。

「どうして棄て、いつたんだらう。」

「うるさいよ。」など、いふ母ではない。何處までも相手になつて、其の意味を説明してくれて、もうおそいから黙つてお寢。」と優しくいつて、又あちらを向いてしまつた。私は亦夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳につく。寢られぬまゝに、私は夜着の中で今聞いた母の説明を繰返し繰返し味つて見た。

まづどこかの飼犬が、縁の下で兒を生んだとする。小さなむく／＼したのが重なり合つて首を擡げて、みい／＼と乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へこんでべろ／＼舐めると、

小さいから舌の先で他愛もなくころ／＼と轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よち／＼と這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、うろたへてちうと吸付いて、小さな両手で揉立て揉立て吸出すと、甘い温かな乳汁がどく／＼と出て來て、咽喉へ流れこみ、胸を下つて、何ともいへずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にありつかぬ兄弟が鼻面で割込んで來るとられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒をやつてみるが、到頭とられてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸付く。其の中にお腹もよくなり、親の肌で身體も温まつてとろけさうな好い心持になり、ついうと／＼となると、含

んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもうろたへて又吸付いて、一しきり吸立てるが、すぐに又他愛なくうとくとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の時忽ち暗やみから、もちやくと毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐる處を無手と引摺み宙に吊す。驚いて目をぼつちり明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたと見えて眞暗になる。窮屈で息氣が詰りさうだから、出ようとするが出られない。暫く藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、えりもとをつままれて、

高い高い處からどさりと落された。うろくとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよばたれ、おそろしく寒くなる。身慄ひ一つしてくんくと親を呼んで見るが何處からも出て來ない。途方に暮れてよちよちと這出し、雨の夜中を唯ひとり温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどうもぐり込んだのか、今は啼聲が正しく立關先に聞える。

「お母さんく、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私は何だか居た、まらないやうな氣になつて、又母に言
掛けると母は氣のなささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて。あらあんなに啼いてゐる……。」

と折柄絶入るやうに啼入る犬の聲に、私は我知らずむつく
り起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、お母さん、行つて見てよう。」

「本當にしやうのない兒だねえ。」

と口小言をいひく、母も澁々起きて、雪洞ボンボリを點けて立上つ

たから、私も其の後について、玄關と云つてもつい次の間だ
が、玄關へ出た。

三三

ボチ その二

母が履脱クソダキへ降りて格子戸の掛金を外し、からりと雨戸を繰
ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちら／＼と靡く。
其の時小な鞠のやうなものが、つと軒下を飛退いたやうだ
つたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸
外の暗黒を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照
らし出した處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月も経た
ぬ、むく／＼と太つた、赤ちやけた犬ころが、小指程の尻尾を

ちぎれさうにふり立て、こちらを見上げてゐる。體は私
が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に
濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に
大きい耳から雫をたらし、ぼつちりと二つの眼を青貝のや
うに列べて光らせてゐる。

「おやく、まあ、可愛らしい。」

と母もついつてしまつた。況や私は犬好だ。ちつとし
て見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつ
ちよつと呼んで見た。

と、さほど怖れた様子もなく、ちよこくと側へ来て、さすが
に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下

からぐいぐい押上げるやうにして、べろくと舐廻し、手を
くれるつもりなのか、頻りに圓い前足を舉げてはたくや
つてゐたが、果てはやんわりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くてたまらない。母の面を見上げなが
ら、少し鼻聲を出し掛けて、

「お母さん、何かやつて。」

「やるも好いけど、居付いてしまふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事をいひながら、それでも臺所へ行つ
て、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁をかけて来てくれた。
早速履脱へ引入れてこれをあてがふと、犬ころは一寸香を
嗅いで、すぐ甘さうに先づびちやくと舐出したが、汁が鼻

の孔へ入ると見えて、時々くしやんくしと小さな噓ウツをする。忽ち汁を舐盡して、今度は飯にかゝつた。他に争ふ兄弟も無いのに、しきりに小言をいひながら、がつくつくとたべ出したが、飯はまだ食ひなれぬかして、とかく上顎ウヂに引付く。首をふつて見るが、そんな事ではなかく、取れない。果ては前足で口の端を引搔くやうな眞似をして大藻搔ウヂに藻搔く。此の際に私は母と談判を始めて、今夜一晚泊めてやつてと、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたがもうかうなつては仕方がない。お父さんに叱られるけれどといひながら、つまり棧俵法師を探して来て、履脱の隅に敷いてやつた。それは好かつたが、其の晩一晚啼通されて、私はち

つとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言をいはれたさうな。

犬嫌の父は、泊めた其の夜を啼明されてしまふと、うんざりして、明くる日は是非逐出すといひ出したから、私は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、併しそれも一時の事で、その中に小犬も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。と、逐出す筈のものに、いつしかポチといふ名まで付いて、姿が見えぬと父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

父がかうなつたのも無論ポチを愛したからではない。唯私にひかされたのだ。私とてもポチを手放し得なかつた

のは、強ちポチを愛したからではない。愛す、愛さんはさておいて、私は唯かはいさうだつたのだ。親の乳首にすがつて居る處を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の兒の運命が、子供心にも果敢なく情ないやうに思はれて、手放すに忍びなかつたのだ。

この忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心の搦み合つた處に、ポチは旨く引懸つて、辛くも棒や石ころの危ない浮世にさまよふ憂目を免れた。で、どうせそれは蜘蛛の巣だらけではあつたらうけれども、ともかくも雨露を凌ぐに足る縁の下の菰の上で、うまくはななくとも朝夕二度の汁かけ飯に事缺かず、まづ無事にのんびりと

育つた

育つにつれて、まるくくと太つてかはいらしかつたのが、身長に幅をとられてひよろ長くなり、しかもひどくときすになつて、一寸狐のやうな犬になつてしまつた。前脚を突張つて、弓のやうに反つて伸をしながら、大きな口をあんぐりあいて、欠アツをする處などは、誰が眼にも餘り見つともよくなかつたから、父は始終「いやな犬だ。」「いやな犬だ。」といつて私をいやがらせたが、私はそんなことで愛をさますやうな心は聊かも無い。いやな犬だといはれるほどなほかはい。「ねえお母さん、こんな犬は何處へ行つたつて、かはいがられやしないねえ。だから内でかはいがつてやるんだね

え。

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、からかふ父と争つた。

犬好は犬が知る。私のこの心はボチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には犬嫌の父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾をふるばかりで、振向きもしないで行つてしまふことがある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから又何か貰へるかと思つて、眼を輝して飛んで来る。そして母の手中にそれらしい物があれば、兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし唯それだけの事で、その時のボチはやつぱり犬に違ひない。

二葉亭四迷
姓名長谷川
名辰之助
文學者
記者
明治
四十八
年

そのやつぱり犬に違ひないボチが、私に對ふと犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか。どつちだかそれは分らないが、とにかく互の情愛に人畜の差別を無くして、渾然として一如となるのである。
(二葉亭四迷一平凡)

三四 蟲 供 養

二三日、前旅から歸つた主人の口から、ふとこんな言葉が洩れた。

「こんどの休日に、いつか果さうと思つて居た蟲供養がして見たいね。」

この頃とかく健康のすぐれぬ主人は、二人までも愛兒を失

研究の爲に
云々
作者の夫、三
宅恒方氏は、理
學博士で、昆
蟲學を研究した人

つた悲しい思出を慰めかねてゐた。何となくたよりない、やるせない思が、ふと蟲供養といふことに考へ及んだのであらう。實際今まで研究の爲に命を取つた昆蟲の數は何萬匹と數へきれぬ程であらう。思へば罪なことである。

「友人は大抵供養をしてゐるやうだ。」

「一體どんなことをしたらよいのでせう。」

二人は寄附といふことも考へた。その他の方法も考へて見た。そして結局、死んだ子供たちの菩提寺で御經の一卷もあげて貰ひ、その近所の子供たちにお菓子でも分けてやつて喜ばせようといふことになつて、寺の住職と相談の上、今日の午前をその日と定めたのであつた。

主人はたまの休日を、窮屈な羽織袴にいでたつた。私たちの支度もできた。主人は艶子の手をひき、私は三郎を抱いて家を出た。僅か數丁の道ではあるが、三郎を抱いた手に汗がしつとりしたくらゐ、随分暑い日であつた。寺の玄關に立つて案内を頼むと十二三の子供が多勢、はたくと驅けて本堂の後の方に隠れた。今日の催しに集つた子供たちかと思ふと、嬉しいやうな氣がする。

風通しのよい座敷に通されて暫く待つ間、艶子も三郎も嬉しい顔して、庭を眺めたり、風鈴を鳴したりしてゐる。其の庭のすぐ下手は墓地で、その一番手前には、亡き恒雄と恒二の墓が建つてゐる。

「いつになく親子が揃つた氣がしますね。子供がこゝに二人、あすこに二人。」

と、私は青葉隠れの墓の方をさした。

用意ができたといふ知らせに、皆本堂に行く。正面には「諸昆蟲の靈」と書いた位牌を据ゑて、それ〴〵飾りつけがしてある。住職が座に着くと、やがて他の二人の僧も座について御經が始まる。先刻奥へ逃げこんだ子供たちが、一列に並んで、行儀よく坐つて御經を聽いてゐる。

やがて御經がすむと、私たちは住職に御禮を言つて寺を出た。一足後れて驅けて來た艶子が、これ御坊さんに戴いたの。と言つて、にこ〴〵しながら御菓子のをさし出した。

大方先刻の子供たちも、今頃分けて貰つてゐるのであらう。あの無邪氣な子供たちが、行儀よく坐つて御經を聽いてゐた姿が忘れられない。

「今日はよい心持だ。何となく大變嬉しい氣がする。」と、晴々した主人の言葉を聞いて、私も非常に嬉しかった。

（三宅やす子―心のあと）

三宅やす子
故三宅恒方氏
未亡人

萬葉集
我が國最古の
歌集
山上憶良
奈良朝時代の
歌人

三五 秋の七草

萬葉集に、山上憶良、秋の野の花を詠める歌、

秋の野に咲きたる花をおよび折り

かき數ふればなゝくさの花

萩が花尾花葛花なでしこの花

をみなへし又藤袴朝貌の花

春は草木の芽ざすと共に、さまざまの花の咲出で、殊に四月の初よりは、限りなき花木の種類、一時に花開き花散り、人は胡蝶と共に、彼を賞し此を惜しみ、殆ど應接に遑なき有様なり。

頓て青葉の蔭繁き夏とな

萩れば、さしも賑しかりし百花の

色も一時に跡なく、俗に「間の時」

とも云ひて、目に觸るゝ所、野も

山も唯一様の緑となり、炎熱の

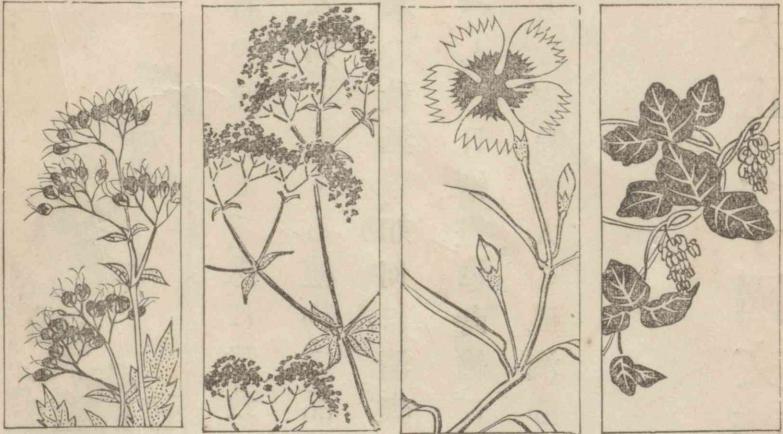
漸く烈しくなるに、人は皆心身



萩



花尾



袴藤

花郎女

子撫

葛

殆ど困憊して、又花を思ふの閑なく、雨を待ち風を迎へて、纔かに晩涼に休息するのみ。斯くて秋風一夜西より至れば、果實は成熟して自然の味を生じ、野山には種々の麗しき草の花ども咲亂れて露に撓めるあり、またあたりの山林には食用に堪へざる小さき木の實までもさまざまの色を呈するあり、人はまた風月に親しむに至る。げ



朝顔

有の産にして、殊に雅致多きものを挙げたれば、是によりて本邦に産する植物の品格を知るべく、又日本の氣候即ち日本の秋氣の、如何に清爽にして人に適するかを知るに足るべし。且繪畫に蒔繪に、是等の花を描きて、その幽韻を愛するなど、日本人の風流心をも見るべし。(松村任三—普通植物)

松村任三
物理學者
博士、植

大正女子國文讀本 卷一終

大正七年九月廿八日發行
大正六年十二月廿五日發行
大正五年十一月廿二日發行
大正四年一月十日發行
第二修正訂正發行
第二修正訂正發行
第二修正訂正發行

大正女子國文讀本第二修正版 全拾册
卷一 定價金 參拾九錢
臨時定價金 六拾六錢

著者

東京市外中野大塚千六百二十五番地

保科孝一

發行者

東京市牛込區白銀町貳拾九番地

合資會社 育英書院

右代表者

目黒甚七

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十八番地

白井赫太郎

精興社



發行所

東京市牛込區白銀町二十九番地
振替口座(東京)七四二番

育英書院

東京市京橋區南傳馬町二丁目
振替口座(東京)二八〇九番

目黒書店

小田七五め

